

平成 28 年度 宇都宮大学 卒業論文

スクールカーストが現在の大学生に与える影響について

教育学部 総合人間形成課程 地域公共領域 4年

131645B

平山 愛理

社会学研究室

指導教諭 小原一馬先生

目次

はじめに

第一章 スクールカーストとは

第一節 スクールカーストの定義

第二節 スクールカーストと容姿・容貌の関連性

第三節 スクールカーストの分析

第二章 スクールカーストの分析～学生へのアンケート調査から～

第一節

第二節 アンケート調査の実施

第三節 アンケート調査の分析・考察

第四節 第二章のまとめ

第三章 スクールカーストを経たその後～学生へのインタビュー調査から～

第一節 インタビュー調査の概要

第二節 インタビュー調査の分析・考察

第三節 第三章まとめ

第四章 総括～スクールカーストを経たその後の過ごし方について～

第一節：アンケート調査から

第二節：インタビュー調査から

第三節：第四章のまとめ

おわりに

謝辞

参考文献・参考URL

調査資料

はじめに

近年、ドラマや漫画、小説等の中で小学生や中高生がクラスメイトを値踏みし、「ランク」付けをするような描写が描かれているものも多く見受けられる。「桐島、部活やめるってよ」や「35歳の高校生」などはスクールカーストが如実に浮かび上がった学園ものの映画やドラマである。このスクールカーストという現象は、映画やドラマだけの世界だと思える人も少なくはないだろうが、実際に私たちの実生活の中にも存在している現象であると言える。

例えば、私は大学四年間塾講師のアルバイトを続けてきた。その際に中学生や高校生と関わり合う中で、彼らも学校生活でクラス内の順位、つまりスクールカーストを気にしながら生活をしているような発言や行動が何度も見受けられた。私自身、中学校時代にスクールカーストを強く意識しており、未だに中学時代を思い返し心にモヤモヤとしたものが浮かび上がってくる時がある。大学生になった今でもこのような感情に悩まされる時があり、中学時代のスクールカーストの経験を思い出す時がある。

そんな中、私は鈴木翔（2010）の「教室内(スクール)カースト」という新書に出会った。この本の中で鈴木は、大学生へのインタビュー調査を通じて、スクールカーストとどのように関わっていけばよいかを今現在学校に通っている人、その保護者、学校の先生に対してアドバイスを行っていた。しかしながら、スクールカーストをすでに経験した私たちのような中学・高校の既卒者に対しては、今後のスクールカーストとの付き合い方について言及されず、そのような人たちは今後スクールカーストとどのように向き合っていけばよいのかという疑問を抱いた。

そこで、この論文では宇都宮大学の学生を対象としてアンケート調査・インタビュー調査を行い、大学生のスクールカーストに対する認識とはどのようなものなのかを調査・分析していく。そしてこの調査を経て、スクールカーストが大学生の現在に与える影響がどのようなものなのか、スクールカーストを経た後、どのようにすればこのスクールカーストを乗り越えていくことができるのかを考えていきたい。

第一章：スクールカーストとは

第一節：スクールカーストとは

鈴木(2010)によると「スクールカースト」とは、主に中学・高校で発生する人気のヒエラルキー（階層性）のことである。俗に『一軍、二軍、三軍』『イケメン、フツメン、キモメン(オタク)』『A、B、C』などと呼ばれるグループに分断され、グループ間交流がほとんど行われなくなる現象のことを示している。しかしながら、この「スクールカースト」は、実は学術的な用語ではないとされている。この言葉が初めて紙面に用いられたのは森口朗の『いじめの構造』という本の中である。森口さんは『いじめモデル』により一層リアリティを持たせるために『スクールカースト(クラス内ステイタス)という概念を導入』していると言っている。つまり、未だに明らかにならない「いじめの仕組み」を明らかにするために「スクールカースト」という概念を持ち出してきたというわけである。

森口は、自身が書いた「いじめの構造」の中でスクールカーストについて以下のように述べている。

スクールカーストとは、クラス内のステイタスを表す言葉として、近年若者たちの間で定着しつつある言葉です。従来と異なるのは、ステイタスの決定要因が、人気やモテるか否かという点であることです。上位から「一軍、二軍、三軍」「A、B、C」などと呼ばれます。

(森口朗『いじめの構造』(2007) P,41-43)

この定義からすると、「スクールカースト」は「人気や『モテ』」を軸とした序列構造だということになる、と鈴木(2010)は述べている。

また、この「スクールカースト」が人々に与える影響として、森口と土井は次の二点を指摘している。

まず一つ目として、「スクールカースト」地位の中で下位に置かれた生徒は、クラスメイトから身分の低い存在、つまり目下の存在だとみなされて、いじめの標的になりやすいということ。そしてもう一つは、たとえばいじめにあわなかったとしても、自分に自信をなくし、学校生活への適応に大きな影響を及ぼすということです。

(鈴木翔『教室内(スクール)カースト』(2012) P,39)

そして、鈴木が中学二年生 2874 名を対象に行った「スクールカースト」による「身分差」

が、生徒の学校生活へ与える影響を調査した結果によると、「スクールカースト」は生徒の学校適応と自己肯定感に相関があることが確認されている。また、学力も同様に学校適応や自己肯定感、いじめの標的のなりやすさに関連があることが確認されたが、学力よりもスクールカーストの方がそれに与える影響は大きいとの検証結果が出ている。また、森口(2007)はクラスの人気のヒエラルキーは、コミュニケーション能力(自己主張力・同調力・共感力)の三次元マトリクスにより規定されているとしており、これがスクールカーストの地位にも影響すると考えている。では、スクールカーストの地位に影響しているというコミュニケーション能力とはどのようなものなのか、一つずつ説明をしていく。まず、自己主張力とは自分の意見をしっかりと主張することができ、他人のネガティブな言動、ネガティブな態度に対してしっかりと戒めることのできる力のことである。次に同調力とは、「場の空気」に応じてボケたりツッコミを入れて盛り上げたりしながら、常に明るい雰囲気を作成する能力のこと。そして最後に、共感力とは他人に対して思いやりをもち、他人の立場や状況に応じて考えることのできる力のことである。森口(2007)はこのコミュニケーション能力の三次元マトリクスについて、以下のように述べている。

自己主張をしなければリーダーシップをとることはできませんが、他者と相互に共感する力(共感力)がなければ人望を得られず、自己主張力も空回りしてしまいます。また、クラスのノリ(空気)に同調し、場合によっては空気を作っていく力(同調力)は、クラスを生き抜く上で不可欠な力です。

(森口朗『いじめの構造』(2007) P.44.45)

しかし、鈴木¹の検証によるとこれらの中で自己主張力と同調力はスクールカーストに影響するが、共感力は影響しないことがわかった。また森(2006)によれば、容姿の優劣もスクールカーストの地位に影響を与えているという。このことから、「スクールカースト」は勉強ができる/できないではなく、生徒たちのコミュニケーション能力や容姿と深く関連していることがわかる。また、「スクールカースト」が高いほど「(自分の気持ちと違って)人が求めるキャラを演じてしまう」傾向があった。以上より、「スクールカースト」は、生徒の学校適応や自己肯定間に影響を与えることが示されたとともに、スクールカーストを成立させているコミュニケーション能力とは、共感力ではなく、自己主張力や同調力であることがわかった。

では、なぜこの自己主張力と同調力がスクールカーストに影響してくるのだろうか。このことについて須藤(2013)は、従来の Sullivan のいう前青年期社会と現在のそれについて比較を交えながら分析している。須藤によると、Sullivan のいう前青年期社会とは、親友関係をもつ人同士が組み合わさり、グループが形成されるものである。また、グループの中で、一人が複数人と親友関係をもつこともある。また、その中の誰かがオピニオンリーダーになることもあるが、それはリーダーとしてみんなを協力させることのできる能力を伴ったり

リーダーである。この時期の子どもたち同士の間では、協業(cooperation)から、共同(協力)(collaboration) 関係を結べるようになっており、自己中心的であった児童期とは異なり、“私たち”ごと(mater of we)に関心を持つような仲間関係である。いわば、リーダーを中心に、グループメンバーが相互互恵的な関係を結び、グループ全体としてみんなが協力しあうような有機的なグループであり、かつ、グループ間にコミュニケーションがあり、緩やかではあってもグループ同士の間につながりがある。これが Sullivan の言う前青年期社会というものである。しかし一方で、今の思春期社会はどのようなグループ関係を築いているのだろうか。須藤はこれを、グループ間のコミュニケーションはほとんどなく、グループ内で世界が完結している、と述べている。したがって、これは、岩宮(2009)の指摘にもあるように、グループの外の人は「他人」と捉える最近の傾向にも裏付けられる。また、グループ内の関係も流動的で、グループのメンバーが排除されたりするなど、同じグループに属するからと言って、いわゆる親友関係とはいえない間柄であるとも述べている。さらには、クラス内での自分の居場所として、グループに自分の位置を確保するため、グループ内のメンバーと絆を強めようと内向きになり、気を遣うようになるという。これは Sullivan が示している前青年期社会における、相手と気が合うから、話が合うなどの内面や性格によって惹かれあう友人関係とは異なり、居場所としての友人関係があると考えられる。彼らが友人間でとっているコミュニケーションは、小さな世界の中で、自分の位置を確保しようとする試みと気遣いから成り立っている。それゆえ、先に述べた鈴木(2012)の「スクールカースト」の調査に見られるように、グループ関係を維持していく上で重要となってくるのは他者の気持ちに深く共感を示す「共感力」ではなく、みんなと一緒に盛り上げられる、ノリに合わせられる、ノリを理解できる、といったような「同調力」と他人に影響を与えたり、周りを喜ばせたり、盛り上げたりできるような「自己主張力」なのである。

また、餅川(2011)によれば、以前とは異なり今現在の彼らのグループ関係は、クラスの中にいくつもの小さな”仲良しグループ“が存在し、それぞれが孤立して互いに関係を持たないようなものとなっている傾向が強くなっていると述べる。そして、各グループは「閉じた状態」で”排他性“を持っているのが特徴であり、クラス集団というものがないと指摘している。この傾向は特に女子に強いとされている。もしそうだとするならば、彼らは、一度入ってしまったグループを容易に抜けだして別のグループに再び所属するようなことは極めて困難で、特に大きな問題が生じない限りそのグループ内で学校生活の大半を過ごさなければならないということになる。このような状況が形成されてしまった理由の一つには、グループに所属する理由として自らの居場所を確保する目的があり、グループイコール自分という認識が強く、自らの所属するグループがイコール自分自身であって、自身のアイデンティティを所属グループに求める傾向が強いのではないか。自分自身に対して周囲から見てわかる「私はこういう人間です。」ということを示す「ラベル」のようなものを貼っているのではないかとみることが出来る。だから彼らは似たような者からなるグループを形成し、そのなかで似たような外見、服装、価値観の者たちに囲まれ、時には同

調しながらふるまい、周囲に承認されることで、不安な自己を保ち、またそこで自己を確認しているのだと考えられる。それゆえ、グループ内の関係を円滑に維持していくために「(自分の気持ちと違って)人が求めるキャラを演じてしまう」ことが極めて重要であり、キャラを演じることによって自分はグループの一員であるということや自分の存在を実感できるのである。

以上のことから、スクールカーストとはクラス内のステイタスを示すものであり、クラス内の順位の決定要因としては学力よりも人気やモテが大きく関わっていることが分かった。また、コミュニケーション能力もカーストの決定に非常に重要な役割を果たしていることが分かった。

次の第二節ではスクールカーストと容姿・容貌の関連性について述べていく。

第二節：スクールカーストと容姿・容貌との関連性について

第二節ではスクールカーストと容姿・容貌との関連性について、高坂(2009)の先行研究を基に分析していく。

第一章でも述べたように、スクールカーストが生じている状態ではグループを「イケメン、フツメン、キモメン(オタク)」という呼び方で分断するなどしている。「イケメン」とは「顔立ちが整っていて格好よい、魅力的な男性。」のことであり、「いけてるメンズ」の略称である。このような言葉を使用してスクールカーストを形成していることから、スクールカーストは彼らの容姿・容貌と深く関連していることがわかる。

高坂(2009)は、青年期は急激な身体的変化による個人差の発生や、身体的変化に伴う自己概念・価値観の不安定化、受験や就職のような競争による自他の差異の意識化などによって、他者との比較が生じやすい時期である、と述べている。また、高田(1999)によれば、高校生や大学生で社会的比較が最も頻繁に行われていることや、高校生や大学生が社会的比較をする理由として、自己不確実感(自分に自信がなく不安だ)や状況不確実感(自分のすべきことや進む方向がわからない)などが多く選ばれているということがわかっている。このことから、青年が不安定な自己の状態を明確にするために他者との比較を行っていることが推測される。しかしながら、このような他者との比較が必ずしも青年にとって肯定的に働くとは限らない、と高田は言う。高田(1994)の大学生を対象とした社会的比較の実態調査によると、社会的比較の結果、劣等感が生じていることを明らかにしている。また、島(1988)は、高校生と大学生を対象とした容姿やプロポーションの自己評価に関する調査を実施し、高校生の41.1%(221名中91名)、大学生の22.1%(240名中53名)が、自分の容姿やプロポーションを「劣っている」と評価していることを明らかとしている。また、「劣等感という苦しい感情に悩まされるということがどんなことかわからないと報告している学生は全体の10%以下にすぎない。(Allport.1937)や「青年期はほかの時期に比べて劣等感が強く感じられる時期である」(返田, 1986)という指摘を踏まえると、多くの青年は、不明確な自己像

を同定しようとして行われる他者との比較によって、劣等感を抱いていると考えられる。

そもそも劣等感とは、人格形成や適応に向かう動機づけとなる感情であるとされている。しかし Adler(1932)は、劣等感が青年にとってポジティブな影響を持つ一方、引きこもりや非行の原因にもなりうると述べている。このように、劣等感は、自己の劣性を補うような努力を生み出しもするが、他者を回避するような行動や、他者に対する攻撃行動などを引き起こす感情でもあると言える。

以上のことから、容姿・容貌の優劣は青年期の自己と他者との比較に非常に大きな影響を与えていることが分かる。スクールカーストにおいては同性からの評価だけではなく、異性から評価も非常に重要となってくる。その時にほとんどの人たちは人の第一印象の評価を外見からするだろう。他人を評価するにあたって容姿や容貌が重要な判断材料となるのは当然のことだと言える。「かわいさ」や「かっこよさ」というのは彼らのカーストを決定するにあたって非常に大きな役割を果たしているのである。それゆえ、容姿や容貌が優れている方が、一概には言えないがスクールカーストの地位にも優位に働くと考える。

さて、第一節と第二節においてスクールカーストはコミュニケーション能力(特に同調力と自己主張力)と容姿・容貌が強く影響を与えていることが分かった。第三節では、スクールカーストの分析に入りたいと思う。小学校、中学校そして高校時代でそれぞれスクールカーストの認識の違いがあることを第三節では説明していく。

第三節：スクールカーストの分析（スクールカーストの認識の違い）

ここで、鈴木（2010）の先行研究を基に小学校時代、中学校時代そして高校時代におけるスクールカーストの認識の違いを述べていく。鈴木が著した「教室内(スクール)カースト」の内容によれば、大学生を対象としてインタビュー調査を行った結果、小学校時代には同学年の児童の間に「スクールカースト」はあまり存在しないということがわかった。強いて言うならば、クラスのメンバー全体が特定の児童一人を嫌っていたり、いじめたりしている状態があった、ということだ。だからこれは「スクールカースト」というよりは、むしろ大多数の生徒が一人の生徒をいじている構図であると考えるのが妥当であるとのことだった。また、「地位」が高いとみなされるような児童は、小学校時代にはほとんどいなかったと答える人がほとんどであった。しかしながら、みんなでする遊びの上手な児童が、「地位」が高い児童だったのではないかと考える人が数人いることもわかった。このことから、小学校時代に「地位」が低いとされているような児童は、いじめの対象となる特定の子、もしくは嫌われている子であり、「地位」が高いと捉えられている児童は、みんなでする遊びがうまい子など、尊敬の対象となるような子である傾向にあったことがわかる。

一方、中学・高校時代のスクールカーストは生徒達からどのように認識されているのだろうか。先にも述べたように、小学校では特定の児童が、「地位」の高い児童、「地位」の低い児童であると把握されている傾向があることが分かった。しかし、中学校以降になると、ほ

とんどの生徒は、同学年の生徒との間にある「地位の差」を、特定の個人の生徒の話ではなく、所属するグループ間の力関係の差であると捉えることが多くなる。そして、そうしたグループに名前をつけて、それぞれのグループの「地位」を把握していったとの話が何人からも聞かれたことが述べられている。このことから、小学校時代、中高時代の児童・生徒のスクールカーストへの認識は少々異なることがわかった。

では、当時スクールカーストがあったことを認識していた人たちはどの程度存在しているのだろうか。ここで、須藤(2013)が大学生を対象にアンケートを実施した結果を紹介する。これによると、「スクールカーストを経験したことがあるか?」という質問に対して、「はい」と答えた人が46名、「いいえ」と答えた人が16名であった。また、その時期についても尋ねたところ、小学校高学年～高校にかけて経験したとの回答があり、中学校時代に経験した、と答えた者が最も多かったこともわかった。また、須藤はこの調査の中で当時スクールカーストが存在していたことを学生たちがどのように感じていたのかを、「このようなグループ(序列化)があることは、学生生活を送る上でどうでしたか?(良かった点/悪かった点、やりやすかった/やりにくかった、など自由に書いてください)」、「このようなグループ(序列化)があったことについて、どう思いますか?」という質問で学生らに回答してもらっている。学生らから得られた回答は以下のようになっている。(表 1-2-1)

表1. 「スクールカーストについてどう思うか?」という質問に対する回答例 (須藤, 2013)

<p><u>良かったという意見</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・決めごとがあると中心グループ人が決めてくれるし、率先してくれるので、その点やりやすかった。 ・私は比較的地味な方だったのですが、とくにいじめはなく、目立つ人達が、話を進めてくれたり、リーダーシップをとってくれたので、あまりスクールカーストによってやりにくいと思うことはなかった。 ・率先して仕切ってくれ、みんながそれに従っていったので私はよかったと思います。 ・良かった点は、行事などがあつたとき上位群がもりあげてくれる。逆に悪かった点は、下位群の子が上位群に対して意見を言えず、上位群の指示に従っていたところ。
<p><u>一長一短である、仕方がないという意見</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・このようなグループの序列化は、仕方がないことだと思う。類は友を呼ぶと言うように、明るく社交的で活動的な子は、そういう子同士で固まるし、どちらかと言うと、おとなしく、積極的でない子は、そういう子と固まると思う。それがたまたまグループ化して、活動的な子がクラスの主導権を握って、そこから序列化が生まれると思う。 ・いいか悪いかは別として仕方がないことだと思う。たとえば、何かを決める際にあまりクラスのことを見れてない子やおとなしいはっとしていの子が仕切っても進まない。そういうことがあるので、グループ化され、それにより運営されていくのは自然な流れだと思う。しかし、乱暴にするのではなく、そこを上手くまとめていくのは上のグループの一種の役目であるとも感じる。 ・誰かが誰かに対して言いなりにならざるを得ない環境になってしまうので、グループの序列化はない方が良くと思うが、クラスを仕切るリーダー的な存在(人気者)は、物事を円滑に進めるには必要なものだったと思う。
<p><u>良くないという意見</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループの順序があることで、いじめがあつたりもしたので、よくなかつたと思う。 ・クラスに力のあるグループがあると、常に、彼らに気を遣わないといけなく、たまにクラス全体がギスギスするような感じを覚えた。グループが上位と下位にわかれたことで、強者と弱者がはっきりし、いじめや服従関係が起きやすくなつていると思う。 ・みんなが平等な立場であることが、一番の平和だと私は考えているため、ランク付けなどしてほしくなかつた。 ・このようなスクールカーストはなくすべきだと思う。上にいる人が人の苦しみを知らないことは理不尽であると思う。皆が平等であると言つておいて実際はそうではないことがあつてはならないのではないか。

表 1-2-1

以上の調査結果にあるように、「スクールカースト」に示される、分断されたグループ化は、当事者たちにとって決して悪いことばかりでもなく、クラスの行事を進める上で上のグループが引っ張ってくれるという点でポジティブともとれる評価もされている。むしろ、「いいか悪いかは別として仕方がないことだと思う」と言い、「上手くまとめていくのは上のグループの一種の役目であるとも感じる」という意見も見られた。一方で、クラスメイトの間に上下関係が生じることで、いじめなどに発展しかねないという点から、否定的にとらえている人もいた。上の表の、「一長一短だが、仕方がないという意見」の中には、このようなグループ化現象についてのいい面と悪い面を同時に評価し、「グループの序列化はない方がいいと思うが、クラスを仕切るリーダー的な存在(人気者)は、物事を円滑に進めるには必要なもの

だった」として、このような現象が起こることを仕方ないことととらえ、また必要であるとも述べているものもあった。またこのアンケートを進める中で、このような現象は決して最近になって突然現れたものというわけではなく、昔からあったのではないかという意見も見られたようだ。このように、スクールカーストに対する個人の評価は多種多様であり、肯定的な側面と否定的な側面のいずれをも持ち合わせていることを確認することができた。

第一章では、鈴木（2010）や須藤（2013）の先行研究を用いてスクールカーストの分析を行った。次の第二章では、宇都宮大学の学生にアンケート調査を実施し、現在の学生がスクールカーストについてどのような認識を持っているか等について調査・検証を行っている。

第二章：スクールカーストの分析～学生へのアンケート調査から～

第一節：第二章の概要

第一章では、専攻研究を通してスクールカーストとはどのようなものかということ述べた。この第二章では、実際に宇都宮大学の大学生へのアンケート調査を実施し、今現在の大学生がスクールカーストについてどの程度認識しているのか、当時スクールカーストをどのように意識していたのか、等について明らかにしていきたい。そして、アンケートの実施後はアンケートの結果を分析し、その結果も含めて学生へのインタビューを行っていく。

では、次の第二節では、実施したアンケート調査の概要を説明していく。

第二節：アンケート調査の実施

第二節では、学生のインタビューの分析を行う前に、調査方法やインタビューの日程、対象者についてまとめる。

今回はインタビューをメインとして調査を行った。しかし、インタビューを行う前に、インタビューがスムーズに進むように、アンケート（質問紙）であらかじめ質問をした。今回はその実施したアンケートを基にして、インタビューを行っている。

アンケートの目的

中高時代の生活が大学生の現在にどのような影響を与えているのかを調査する。

アンケートの方法

調査回答者 分析を行った調査回答者は、宇都宮大学の大学1～4年生206名（女子122名、男子77名 性別未記入7名）であった。

アンケートの調査時期 2016年11月

アンケートの調査内容 アンケート(質問紙)の内容は実際に用いた調査用紙をこの論文の最後に記載する。

第三節：アンケート調査の分析

第三節でアンケート調査の分析を行っていく。このアンケート調査の分析によって、回答者がスクールカーストをどの程度認識していたのか、スクールカーストがあったようなクラスはどのようなクラス状況だったのか、また中高時代のスクールカーストを経て、今現在の生活にはどのような影響があるのか等を明らかにしていきたい。

まず初めに、アンケート調査を行った大学生が「スクールカースト」という言葉をどの程度認識しているのかについて見ていきたい。アンケート調査では、スクールカーストの認知度を知るために「スクールカーストという言葉を知っていますか？」という質問項目を立て回答者に回答を求めた。その結果、図 1 のような回答結果が得られた。図 1 を見るとスクールカーストという言葉を知っている人が最も多く 43%、また、「なんとなく知っている」と回答した人が 42%と二番目に多かった。よって回答者のうちの 85%もの学生がスクールカーストという言葉を知っており、大学生におけるスクールカーストについての認知度は非常に高いとすることができる。

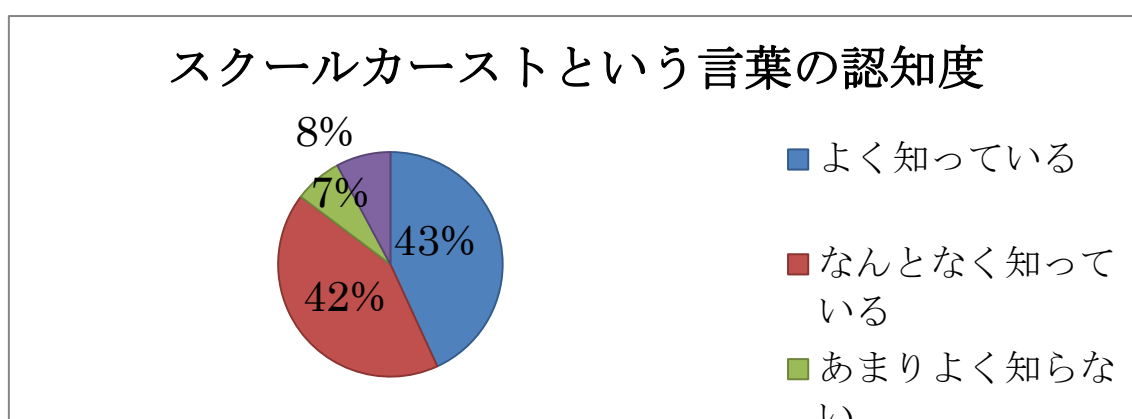
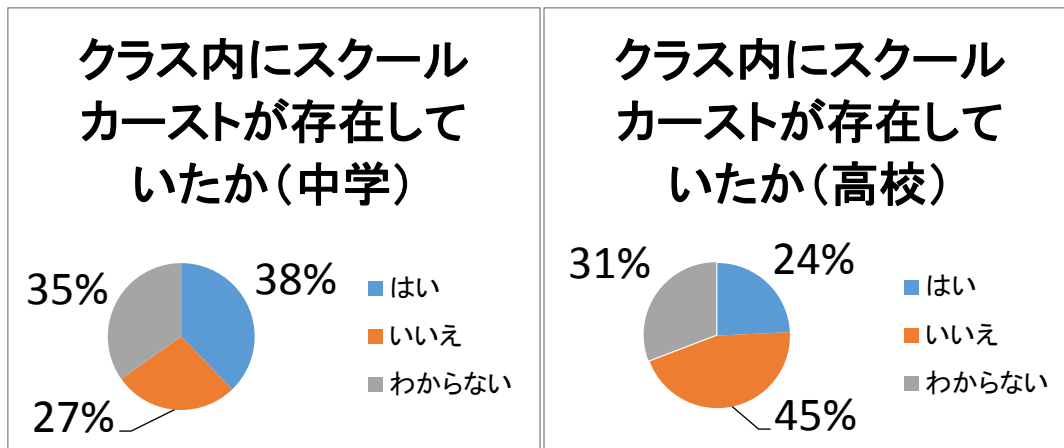


図 1

次に、回答者が中学高校時代にクラス内でスクールカーストがどの程度存在していたのかについて見ていく。アンケート調査では中学校時代と高校時代のそれぞれで「あなたのクラスにはスクールカーストが存在していたと思いますか？」という質問項目を立て回答者から回答を得た。その結果、図 2 と図 3 のような結果が得られた。図 2 は中学校時代に、図 3 は高校時代に、クラス内にスクールカーストが存在していたか否かを表したグラフである。この二つの図を見ると、中学校時代にはスクールカーストが存在していたと回答した学生が最も多く 38%となっている。しかしながら、高校時代になると 45%の学生がスクールカーストは存在していなかったと回答し、中学校時代とはまた違った結果になった。このことから、第一章でも述べたように、スクールカーストは中学校時代に経験することが多いと言えるだろう。しかしながら、図によるとスクールカーストが存在していたかはわからないと回答した学生が中学校時代と高校時代のいずれにおいても 30%以上存在するため、誰

しもが必ず中学校時代や高校時代にスクールカーストを経験したとは限らないということもわかった。



左から、図2、図3

また、次はスクールカーストと中学校、高校の環境がどのようなものだったかの関連性について分析していく。私はまずスクールカーストが存在するような中学・高校の環境とはどのようなものだろうかと考えた。そこで、スクールカーストが存在するようなクラス内の環境について3つ仮説を立てた。1つ目はクラス内に形成されているグループにおいて、そのグループ間をつなぐような人物がいれば、スクールカーストは存在しないのではないかと、という仮説だ。これは個々のグループが独立した状態にあるとグループ間でカーストが生じる可能性もある。よって、グループ間を渡り歩くことができる存在がいることによって、グループが閉鎖的になることなく、カーストも生まれにくいのではないかと考えた。また、2つ目はクラス内を仕切っているグループが存在すれば、スクールカーストも存在するのではないかと、という仮説だ。これは、クラス内を仕切っているようなグループが存在している場合、クラス内の相互のグループ間にも序列化が生じてくるだろうと考えたからである。グループ同士に序列がつくことによって、クラス内のグループは横並びの状態ではなくなり、スクールカーストも生じてくるのではないかと考えたため、仮説2を立てた。そして最後に3つ目として、クラス内の男女間の仲が良ければ、スクールカーストは存在しないのではないかと、という仮説である。これは、クラス内の男女間の仲が良ければ、クラス内全体の仲が良いと考えられるためカーストのようなクラス内順位が生まれ不会ではないかと考えたからである。では、この三つの仮説について実際にアンケート調査についてクロス表分析を用いて検証していく。

まず、表2-3-1は高校時代のグループ間をつなぐ人の有無とクラス内にスクールカーストが存在していたかという質問に対する回答のクロス表分析である。表2-3-1を見ると、カイ二乗検定により有意でないことが分かる。中学校時代も同様にクロス表分析を行ってみた

が、こちらも同様に、カイ二乗検定により有意ではないことがわかった。よって、この仮説は正しくないと考えられるだろう。

グループ間をつなぐ人の有無とクラス内にスクールカーストが存在していたかのクロス表

			クラス内にスクールカーストが存在していたか			合計
			はい	いいえ	わからない	
グループ間をつなぐ人の有無	いた	度数	43	72	43	158
		グループ間をつなぐ人の有無の%	27.2%	45.6%	27.2%	100.0%
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	91.5%	87.8%	89.6%	89.3%
	いなかった	度数	4	10	5	19
		グループ間をつなぐ人の有無の%	21.1%	52.6%	26.3%	100.0%
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	8.5%	12.2%	10.4%	10.7%
合計		度数	47	82	48	177
		グループ間をつなぐ人の有無の%	26.6%	46.3%	27.1%	100.0%
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	.430 ^a	2	.806
尤度比	.440	2	.803
線型と線型による連関	.087	1	.768
有効なケースの数	177		

a. 0セル(0.0%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は5.05です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	.021	.067	.311	.756
有効なケースの数	177			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-1

次に、2つ目の仮説を検証していく。表 2-3-2 はクラス内に仕切っているグループが存在していたかとクラス内にスクールカーストが存在していたかという質問に対する回答のクロス表分析である。表 2-3-2 を見ると、カイ二乗検定により、5%水準を下回っているためこれは有意であることがわかる。よって、仮説 2 に関してはクラス内に仕切っているグループがあったこととクラス内にスクールカーストが存在していたことには相関があると考えられるだろう。ここからクラス内に仕切っているグループが存在していれば、クラス内にスクールカーストが生じている傾向にあると考えることができる。

仕切っているグループの有無(高校)とクラス内にスクールカーストが存在していたかのクロス表

			クラス内にスクールカーストが存在していたか			合計
			はい	いいえ	わからない	
仕切っているグループの有無(高校)	あった	度数	36	27	22	85
		仕切っているグループの有無(高校)の%	42.4%	31.8%	25.9%	100.0%
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	83.7%	31.4%	44.9%	47.8%
	なかった	度数	7	59	27	93
		仕切っているグループの有無(高校)の%	7.5%	63.4%	29.0%	100.0%
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	16.3%	68.6%	55.1%	52.2%
合計	度数	43	86	49	178	
	仕切っているグループの有無(高校)の%	24.2%	48.3%	27.5%	100.0%	
	クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	31.680 ^a	2	.000
尤度比	33.753	2	.000
線型と線型による連関	12.349	1	.000
有効なケースの数	178		

a. 0セル(0.0%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は20.53です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	.245	.071	3.448	.001
有効なケースの数	178			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-2

そして最後に仮説3の検証をする。仮説3は、クラス内の男女間の仲が良ければ、クラス内のスクールカーストは存在しないのではないかと、という仮説であった。表2-3-3は中学校時代のクラス内の男女間の仲はどのようなものだったかとクラス内にスクールカーストが存在していたかという質問に対しての回答をクロス表分析したものである。表2-3-3を見るとカイ二乗検定により、5%水準を下回っているため、このクロス表は有意であると言える。よって、仮説3のクラス内の男女間の仲とクラス内にスクールカーストが存在していたかについても相関があると考えられるだろう。よって、スクールカーストがクラス内に存在するようなクラスには、クラスの男女間の仲も関係してくるということがわかった。

クラス内にスクールカーストが存在していたか*男女間の仲

クロス表

			男女間の仲				合計
			とてもよかつた	よかつた	あまりよくなかつた	悪かつた	
クラス内にスクールカーストが存在していたか	はい	度数	8	46	19	4	77
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	10.4%	59.7%	24.7%	5.2%	100.0%
	男女間の仲の%	38.1%	55.4%	82.6%	100.0%	58.8%	
	いいえ	度数	13	37	4	0	54
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	24.1%	68.5%	7.4%	0.0%	100.0%
	男女間の仲の%	61.9%	44.6%	17.4%	0.0%	41.2%	
合計		度数	21	83	23	4	131
		クラス内にスクールカーストが存在していたかの%	16.0%	63.4%	17.6%	3.1%	100.0%
		男女間の仲の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗 尤度比	12.290 ^a 14.297	3	.006 .003
線型と線型による連関 有効なケースの数	11.906 131	1	.001

a. 2セル(25.0%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は1.65です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウb	-.285	.072	-3.798	.000
有効なケースの数	131			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表2-3-3

では、中学・高校時代のスクールカーストが今現在の大学生活にどのような影響を与えているかについて分析していく。はじめに中学・高校時代のクラス内順位と劣等感の関係性について見ていく。表 2-3-4 と表 2-3-5 は中学・高校時代のクラス内順位と今現在の生活の中で日頃劣等感を感じているかについてのクロス表分析である。このクラス内順位は順位を上中下の3分割に分けており、以後はこれをスクールカーストの順位と同様として見ていくことにする。これは仮説として中学・高校時代のクラス内順位が高ければその人は日常生活において劣等感を感じる人が少なく、反対にクラス内順位が低ければその人は日常生活において劣等感を抱きやすいのではないかという仮説を立てた。表 2-3-4 を見ると、まず中学校時代においての表では順位相関の検定において5%水準以下のため、この結果は有意だと言える。次に表 2-3-5 の高校時代においても順位相関の検定において5%水準以下と言えるため、この結果も有意であると言える。このことから、中高時代のクラス内順位で順位が高い人ほど今現在の生活の中で劣等感を感じる人が少なく、反対に中高時代にクラス内順位が低い人ほど、今現在の生活の中で劣等感を感じる人が多い傾向にあると言える。しかしながら、クラス順位が上位の人たちでも日々劣等感を感じている人たちもおり、逆にクラス内順位が下位だと認識していた人たちでも劣等感を感じないような人たちもいるため、劣等感の感じやすさがクラス内順位と深く関わっていると一概には言えない。しかしながら、クロス表の分析を見る限りでは、中高時代のスクールカーストは大学生の劣等感の感じやすさに少なからず影響を与えていると考えることができるだろう。

また、もう一つの仮説として、中高時代に経験したスクールカーストはその人の今現在における社交性にも影響を与えているのではないかと、という仮説を立てた。第1章でも述べたように、生徒のスクールカーストの位置づけはその本人のコミュニケーション能力（同調力や自己主張力）と大きく関わっているとされている。ここでの社交性とは、このようなコミュニケーション能力等が備わっていることを指すことにする。よって、社交性が高い人ほどスクールカーストの順位も高いのではないかと考えた。この社交性の尺度については、今現在の友人関係に着目して測ることができると考えた。表 2-3-6 と表 2-3-7 は中高時代のクラス内順位と今現在気軽に遊びに誘える友人がどの程度いるかについてのクロス表分析である。ここでは気軽に遊びに誘える友人の人数が多いほど社交性が高いという見方で考える。表 2-3-6 では中学生時代のクラス内順位と今現在気軽に遊びに誘える友人の人数についてである。この表を見ると順位相関の検定において5%水準以下に近いため、有意傾向があると言える。また、表の 2-3-7 は高校時代のクラス内順位と今現在気軽に遊びに誘える友人の人数のクロス表である。この表においては順位相関の検定が5%水準を下回っているため、有意性が確認されたことになる。したがって、中高時代のスクールカーストと社交性の関係性はクラス内の順位が高いほど今現在の社交性も高く、クラス内の順位が低いほど社交性も低い傾向にあると2つの表から読み取ることができる。また、もう一つ別のデータから分析をしてみると、表 2-3-8 と表 2-3-9 からも同じようなことが言えると思われる。この2つの表は中高時代のクラス内順位と「すぐに友達を作ること

ができる。」というようなその人の外向性を測る質問項目をクロス表分析した結果である。これを見ると、表 2-3-8 においても表 2-3-9 においても、順位相関の検定が共に 5% 水準以下であり、有意であるということが確認できる。以上の結果から、中高時代のクラス内順位の決定とその人の外向性は非常に関連性があると言える。これによると、外向性が高い性格の学生は中高時代のクラス内順位が高い傾向にあることが見受けられる。

この 2 つの分析結果から、中高時代のクラス内順位の決定と社交性には関連があることがわかった。しかし、この結果に対する解釈として二つの解釈が考えられるだろう。まず一つ目の解釈としてもととの社交性が高かったためにスクールカーストの順位も高くなったということ。二つ目は中学・高校時代のスクールカーストが高かったために現在の社交性も高まったということである。この二つの解釈について、私はどちらの解釈も正しいと考える。よって、元々本人が持ち合わせていたコミュニケーション能力によって、スクールカーストの順位も高く、その後も変わらず高い社交性を持っている学生もいれば、中高時代のスクールカーストを経て、クラスの中心的な役割を果たし、多くの友人と関わりを持つに至ったことで、その後社交性が高まった学生もいると考えることができるだろう。

そして次は、中学・高校時代にスクールカーストがあったこともしくはなかったことが今現在の自分にどのような影響を与えているのかについて分析をしていく。

クラス内順位(中学) * 日頃劣等感を感じるか

クロス表

			日頃劣等感を感じるか		合計
			はい	いいえ	
クラス内順位(中学)	上位	度数	15	23	38
		クラス内順位(中学)の%	39.5%	60.5%	100.0%
	中位	度数	36	33	69
		クラス内順位(中学)の%	52.2%	47.8%	100.0%
	下位	度数	14	3	17
		クラス内順位(中学)の%	82.4%	17.6%	100.0%
合計	度数	65	59	124	
	クラス内順位(中学)の%	52.4%	47.6%	100.0%	

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	8.662 ^a	2	.013
尤度比	9.260	2	.010
線型と線型による連関	7.743	1	.005
有効なケースの数	124		

a. 0 セル (0.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 8.09 です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似 t 値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendall のタウ b	-.234	.080	-2.866	.004
有効なケースの数	124			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-4

クラス内順位(高校) * 日頃劣等感を感じるか

クロス表

			日頃劣等感を感じるか		合計
			はい	いいえ	
クラス内順位(高校)	上位	度数	11	18	29
		クラス内順位(高校)の%	37.9%	62.1%	100.0%
	中位	度数	44	28	72
		クラス内順位(高校)の%	61.1%	38.9%	100.0%
	下位	度数	10	6	16
		クラス内順位(高校)の%	62.5%	37.5%	100.0%
合計	度数	65	52	117	
	クラス内順位(高校)の%	55.6%	44.4%	100.0%	

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	4.861 ^a	2	.088
尤度比	4.855	2	.088
線型と線型による連関	3.569	1	.059
有効なケースの数	117		

a. 0 セル (0.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 7.11 です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似 t 値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendall のタウ b	-.174	.088	-1.961	.050
有効なケースの数	117			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-5

クラス内順位(中学) * 気軽に遊びに誘える友人の人数

クロス表

			気軽に遊びに誘える友人の人数				合計
			いない	1人～	5人～	10人～	
クラス内順位(中学)	上位	度数	1	10	19	13	43
		クラス内順位(中学)の%	2.3%	23.3%	44.2%	30.2%	100.0%
	中位	度数	1	33	32	14	80
		クラス内順位(中学)の%	1.3%	41.3%	40.0%	17.5%	100.0%
	下位	度数	0	10	8	4	22
		クラス内順位(中学)の%	0.0%	45.5%	36.4%	18.2%	100.0%
合計		度数	2	53	59	31	145
		クラス内順位(中学)の%	1.4%	36.6%	40.7%	21.4%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	6.117 ^a	6	.410
尤度比	6.492	6	.370
線型と線型による連関	3.084	1	.079
有効なケースの数	145		

a. 4セル(33.3%)は期待度数が5未満です。最小期待度は.30です。

対称性による類似度

		値	漸近標準誤差 ^a	近似t値 ^b	近似有意確率
順序と順序	Kendallのタウ b	-.145	.075	-1.935	.053
有効なケースの数		145			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-6

クラス内順位(高校) * 気軽に遊びに誘える友人の人数

クロス表

			気軽に遊びに誘える友人の人数				合計
			いない	1人～	5人～	10人～	
クラス内順位(高校)	上位	度数	0	6	12	14	32
		クラス内順位(高校)の%	0.0%	18.8%	37.5%	43.8%	100.0%
	中位	度数	2	31	38	12	83
		クラス内順位(高校)の%	2.4%	37.3%	45.8%	14.5%	100.0%
	下位	度数	0	10	5	5	20
		クラス内順位(高校)の%	0.0%	50.0%	25.0%	25.0%	100.0%
合計	度数	2	47	55	31	135	
	クラス内順位(高校)の%	1.5%	34.8%	40.7%	23.0%	100.0%	

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	15.592 ^a	6	.016
尤度比	15.907	6	.014
線型と線型による連関	6.919	1	.009
有効なケースの数	135		

a. 4セル(33.3%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は.30です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似t値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	-.218	.081	-2.657	.008
有効なケースの数	135			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-7

クラス内順位(中学) * すぐに友達を作ることができる

クロス表

		すぐに友達を作ることができる					合計
		当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	当てはまらない	
クラス内順位(中学) 上位	度数	9	18	9	4	1	41
	クラス内順位(中学)の%	22.0%	43.9%	22.0%	9.8%	2.4%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	39.1%	34.6%	25.7%	17.4%	12.5%	29.1%
中位	度数	14	30	17	16	2	79
	クラス内順位(中学)の%	17.7%	38.0%	21.5%	20.3%	2.5%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	60.9%	57.7%	48.6%	69.6%	25.0%	56.0%
下位	度数	0	4	9	3	5	21
	クラス内順位(中学)の%	0.0%	19.0%	42.9%	14.3%	23.8%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	0.0%	7.7%	25.7%	13.0%	62.5%	14.9%
合計	度数	23	52	35	23	8	141
	クラス内順位(中学)の%	16.3%	36.9%	24.8%	16.3%	5.7%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	26.131 ^a	8	.001
尤度比	24.615	8	.002
線型と線型による連関	12.737	1	.000
有効なケースの数	141		

a. 5セル(33.3%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は1.19です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	.247	.066	3.615	.000
有効なケースの数	141			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-8

クラス内順位(高校) * すぐに友達を作ることができる

クロス表

		すぐに友達を作ることができる					合計
		当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	当てはまらない	
クラス内順位(高校) 上位	度数	8	13	9	1	1	32
	クラス内順位(高校)の%	25.0%	40.6%	28.1%	3.1%	3.1%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	38.1%	28.9%	26.5%	4.5%	12.5%	24.6%
中位	度数	10	26	21	18	4	79
	クラス内順位(高校)の%	12.7%	32.9%	26.6%	22.8%	5.1%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	47.6%	57.8%	61.8%	81.8%	50.0%	60.8%
下位	度数	3	6	4	3	3	19
	クラス内順位(高校)の%	15.8%	31.6%	21.1%	15.8%	15.8%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	14.3%	13.3%	11.8%	13.6%	37.5%	14.6%
合計	度数	21	45	34	22	8	130
	クラス内順位(高校)の%	16.2%	34.6%	26.2%	16.9%	6.2%	100.0%
	すぐに友達を作ることができるの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	11.557 ^a	8	.172
尤度比	12.314	8	.138
線型と線型による連関	5.168	1	.023
有効なケースの数	130		

a. 6セル(40.0%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は1.17です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	.171	.076	2.233	.026
有効なケースの数	130			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-9

前述したようにここからは中学・高校時代にスクールカーストがあったこともしくはなかったことが現在の自分にどのような影響を与えたかについて分析を行っていく。これについてはアンケート調査の中で「中高時代にスクールカーストがあったこともしくはなかったことが現在のあなたにどのくらい影響を与えていると思いますか？」という質問に対して、「とても与えている」「まあ与えている」と回答してくれた学生にのみ「それは現在のあなたにどのような影響を与えていますか？」という質問で自由回答をしてもらった。自由回答の中にはスクールカーストがあったことやなかったことについて前向きな意見の記述もあれば逆にそれについて後ろ向きな意見の記述もあり、さまざまであった。以下の下にアンケート調査で得られた回答をまとめていく。

	肯定的な意見	否定的な意見
スクールカースト有り	<ul style="list-style-type: none"> ・誰とでも気兼ねなく話すことができる。 ・リーダーシップを取ることができるようになった ・下のほうの人の気持ちがわかる ・よかった ・自信がついた 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に自信が持てなくなった。 ・目立つことを控えるようになった ・人の目を気にしすぎてしまう ・周りのヒソヒソ話などにおびえるようになった。 ・思い切って発言ができない
スクールカースト無し	<ul style="list-style-type: none"> ・みんな仲良く、平等に生活ができています。 ・周囲の人を先入観を持たずフラットに見ることができるようになった ・みんなに分け隔てなく接することが当たり前になった 	回答なし

図 4

専攻研究でも見受けられたようにスクールカーストがあったこともしくはなかったことについては肯定的な意見もあれば否定的な意見もあり、感じ方は人それぞれのような感じだった。また、スクールカーストがなかったことによって否定的な意見は

見受けられなかった。

(1) 劣等感と現在の生活の関連性

(2)

次に劣等感について分析を行っていく。劣等感とは容姿，体力，知的能力，性格，血筋，財産，社会的地位などの点で、自分が他人よりも劣っていると感じるような感情である。また、これは客観的に劣っているということよりも、主観的に劣っていると思いつむことにより生じるとされている。先に分析した結果によれば表 2-3-5 と表 2-3-6 から中高時代にスクールカーストが低い人ほど劣等感を抱きやすい傾向にあることがわかった。この理由の一つとして私は、中高時代においてカーストが下位だと感じている人たちが中位や上位の人たちを見て、自分は彼らよりも劣っていると感じる瞬間に多く直面し、それを今現在も引きずっており、普段の生活の中で劣等感を抱くことが多くあるからなのではないか、と考えた。では、劣等感を感じやすい、もしくは感じにくい人たちにはどのような共通点や傾向が見られるのだろうか。以下もまた質問紙から得られた結果をクロス表に表わして分析していく。まず、表 2-3-10 は今現在気軽に遊びに誘える人数と日頃劣等感を感じているのかのクロス表分析を示している。クロス表を見ると順位相関の検定において 5%水準を下回っているため、有意だと言える。これによれば気軽に遊びに誘える友人の有無や人数は劣等感を感じることに関連があると考えられる。つまり、日頃から友人と交流を図る機会が多い人ほど、劣等感を感じにくいということが分かる。また、表 2-3-11 は気軽に遊びに誘える友人の人数と自分には人よりも優れたところがあるかのクロス表分析である。表を見る順位相関の検定により 5%水準以下のため、このデータ結果は有意であると言える。よって表から、気軽に遊びに誘える友人の人数が多ければ、自分は人よりも優れているところがあると感じる傾向が高いことがわかる。松井（2009）によると青年の社会化における友人関係の機能として 3つの機能を挙げている。その中の一つに「安定化の機能」がありこれは、「友人は緊張を解消し不安を和らげる精神的安定に必要な存在で、悩みの相談を通して問題解消の一助となったり、遊びや一緒に活動を通してストレス発散や心理的ゆとりがもたらされたりする」機能のことをいう。それゆえ、気軽に遊べる友人が多ければ多いほど心のゆとりが広がり、自分に自信を持てるようになるのではないかと考えた。また、表 2-3-12 は大学生活の充実度と日ごろ劣等感を感じているかをクロス表分析した結果である。私は日ごろの劣等感の感じやすさには今現在の生活環境が本人の中でどの程度満足感のあるものとなっているかによって大きく異なるのではないかと考えた。そのため、現在の生活環境の充実度を測るための項目として「あなたの現在の学生生活はどの程度充実していますか？」という質問をアンケート調査で回答してもらった。その結果、表 2-3-12 を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果も有意であると言える。この結果から、大学生活が十分に充実していれば日ごろ劣等感も抱きにくく、逆に大学生活があまり充実していないと感じている人ほど劣等感を抱きやすくなっている傾向にあることがわかる。

学生の本分とは一番はやはり学業に専念することではあるが、それ以外にもなによりサークル活動を充実させたり友人と旅行へ行ったりなど、残りの学生生活を楽しく過ごすことも学生の醍醐味だといえるだろう。大学生が大学生活の中で何かから充実感を得ているのかは人それぞれではあるが、その何かから充実感を得ることによって、劣等感を感じにくくなるのだということがこのクロス表から分析することができた。

また、大学生活の充実度に着目してみると、次のことがわかった。表 2-3 は趣味の有無と大学生活の充実度を、表 2-3-13 は一人きりでも没頭できる趣味の有無と大学生活の充実度を示すクロス表である。表 2-3-13 を見るとカイ二乗検定において 5% 水準を下回っている。よってこのクロス表は有意であると言える。しかし、一人きりでも没頭できる趣味があるかと大学生活の充実度の関係性を示す表 2-3-14 はカイ二乗検定により、有意であることがわかる。したがってこれらのクロス表からは、何か自分が没頭できるような趣味を持っていることによって、大学生活の充実度がより一層高まるということがわかった。しかしながら、その趣味は一人きりでも没頭できるような趣味よりも、誰かと一緒になって行うことができるようなものの方が、充実度を高めることができるのだろうと考えることができる。

上記では、劣等感と現在の生活との関連性を見てきた。では、スクールカーストと劣等感の関係にはどのようなことが言えるのだろうか。次に述べていく。

気軽に遊びに誘える友人の人数 * 日頃劣等感を感じるか

クロス表

			日頃劣等感を感じるか		合計
			はい	いいえ	
気軽に遊びに誘える友人の人数	いない	度数	1	1	2
		気軽に遊びに誘える友人の人数の%	50.0%	50.0%	100.0%
	1人～	度数	43	22	65
		気軽に遊びに誘える友人の人数の%	66.2%	33.8%	100.0%
5人～	度数	37	31	68	
	気軽に遊びに誘える友人の人数の%	54.4%	45.6%	100.0%	
10人～	度数	14	19	33	
	気軽に遊びに誘える友人の人数の%	42.4%	57.6%	100.0%	
合計		度数	95	73	168
		気軽に遊びに誘える友人の人数の%	56.5%	43.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	5.281 ^a	3	.152
尤度比	5.309	3	.151
線型と線型による連関	4.662	1	.031
有効なケースの数	168		

a. 2セル (25.0%) は期待度数が5未満です。最小期待数は.87です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似t値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	.160	.072	2.228	.026
有効なケースの数	168			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-10

気軽に遊びに誘える友人の人数 * 人よりも優れたところがある

クロス表

			人よりも優れたところがある				合計	
			当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない		
気軽に遊びに誘える友人の人数	いない	度数 気軽に遊びに誘える友人の人数の%	1 33.3%	1 33.3%	1 33.3%	0 0.0%	3 100.0%	
	1人～	度数 気軽に遊びに誘える友人の人数の%	11 15.5%	25 35.2%	30 42.3%	5 7.0%	71 100.0%	
	5人～	度数 気軽に遊びに誘える友人の人数の%	14 16.9%	43 51.8%	24 28.9%	2 2.4%	83 100.0%	
	10人～	度数 気軽に遊びに誘える友人の人数の%	12 33.3%	15 41.7%	9 25.0%	0 0.0%	36 100.0%	
合計			度数 気軽に遊びに誘える友人の人数の%	38 19.7%	84 43.5%	64 33.2%	7 3.6%	193 100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	14.175 ^a	9	.116
尤度比	14.521	9	.105
線型と線型による連関	7.901	1	.005
有効なケースの数	193		

a. 7セル (43.8%) は期待度数が5未満です。最小期待度は.11です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似t値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウb	-.184	.065	-2.811	.005
有効なケースの数	193			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-11

日頃劣等感を感じるかと大学生生活の充実度のクロス表

	大学生生活の充実度				合計		
	とても充実している	まあ充実している	あまり充実していない	全く充実していない			
日頃劣等感を感じるか	はい	度数	21	57	12	1	91
		日頃劣等感を感じるかの%	23.1%	62.6%	13.2%	1.1%	100.0%
		大学生生活の充実度の%	36.8%	64.8%	75.0%	100.0%	56.2%
	いいえ	度数	36	31	4	0	71
		日頃劣等感を感じるかの%	50.7%	43.7%	5.6%	0.0%	100.0%
		大学生生活の充実度の%	63.2%	35.2%	25.0%	0.0%	43.8%
合計	度数	57	88	16	1	162	
	日頃劣等感を感じるかの%	35.2%	54.3%	9.9%	0.6%	100.0%	
	大学生生活の充実度の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	14.379 ^a	3	.002
尤度比	14.889	3	.002
線型と線型による連関	13.269	1	.000
有効なケースの数	162		

a. 2セル (25.0%) は期待度数が5未満です。最小期待度数は.44です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	-.282	.071	-3.929	.000
有効なケースの数	162			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-12

打ち込むことができる趣味の有無 * 大学生生活の充実度

クロス表

			大学生生活の充実度				合計
			とても充実している	まあ充実している	あまり充実していない	全く充実していない	
打ち込むことができる趣味の有無	ある	度数	64	95	13	2	174
		打ち込むことができる趣味の有無の%	36.8%	54.6%	7.5%	1.1%	100.0%
		大学生生活の充実度の%	97.0%	88.8%	65.0%	100.0%	89.2%
	ない	度数	2	12	7	0	21
		打ち込むことができる趣味の有無の%	9.5%	57.1%	33.3%	0.0%	100.0%
		大学生生活の充実度の%	3.0%	11.2%	35.0%	0.0%	10.8%
合計	度数	66	107	20	2	195	
	打ち込むことができる趣味の有無の%	33.8%	54.9%	10.3%	1.0%	100.0%	
	大学生生活の充実度の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	16.597 ^a	3	.001
尤度比	14.315	3	.003
線型と線型による連関	11.052	1	.001
有効なケースの数	195		

a. 3セル (37.5%) は期待度数が5未満です。最小期待度数は.22です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendall のタウ b	.232	.062	3.199	.001
有効なケースの数	195			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-13

1人きりでも没頭できる趣味の有無 * 大学生生活の充実度

クロス表

		大学生生活の充実度				合計
		とても充実している	まあ充実している	あまり充実していない	全く充実していない	
1人きりでも没頭できる趣味の有無	ある	度数 55	95	13	2	165
		1人きりでも没頭できる趣味の有無の % 33.3%	57.6%	7.9%	1.2%	100.0%
		大学生生活の充実度の % 83.3%	88.0%	61.9%	100.0%	83.8%
1人きりでも没頭できる趣味の有無	ない	度数 11	13	8	0	32
		1人きりでも没頭できる趣味の有無の % 34.4%	40.6%	25.0%	0.0%	100.0%
		大学生生活の充実度の % 16.7%	12.0%	38.1%	0.0%	16.2%
合計	度数	66	108	21	2	197
	1人きりでも没頭できる趣味の有無の %	33.5%	54.8%	10.7%	1.0%	100.0%
	大学生生活の充実度の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	9.172 ^a	3	.027
尤度比	8.014	3	.046
線型と線型による連関	1.133	1	.287
有効なケースの数	197		

a. 3セル (37.5%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は.32です。

対称性による類似度

	値	漸近標準誤差 ^a	近似丁値 ^b	近似有意確率
順序と順序 Kendallのタウ b	.064	.077	.825	.410
有効なケースの数	197			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-14

(2) スクールカーストを経たその後

表 2-3-4 と表 2-3-5 においてスクールカーストと劣等感の関係性を見た。その結果、現在の生活の中で劣等感を抱くか否かということとスクールカーストの順位にはある程度関係性があることがわかった。したがって、このことは今現在劣等感を感じているような人は中高時代のスクールカーストを未だに引きずっている、と言い換えることができるだろう。では、そのような学生には、どのような特徴があるのだろうか。ここでもアンケート調査の結果からクロス表分析を用いてみていくことにする。分析の結果、これとは主にその学生の性格が関係していることがわかった。下でそれについて述べていく。

誠実性				日頃劣等感を感じるか		合計
				はい	いいえ	
当てはまる	クラス内順位(高校)	上位	度数	7	15	22
			クラス内順位(高校)の%	31.8%	68.2%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	18.9%	38.5%	28.9%
	中位	度数	23	22	45	
		クラス内順位(高校)の%	51.1%	48.9%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	62.2%	56.4%	59.2%	
	下位	度数	7	2	9	
		クラス内順位(高校)の%	77.8%	22.2%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	18.9%	5.1%	11.8%	
	合計			度数	37	39
			クラス内順位(高校)の%	48.7%	51.3%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
当てはまらない	クラス内順位(高校)	上位	度数	4	3	7
			クラス内順位(高校)の%	57.1%	42.9%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	15.4%	27.3%	18.9%
	中位	度数	20	4	24	
		クラス内順位(高校)の%	83.3%	16.7%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	76.9%	36.4%	64.9%	
	下位	度数	2	4	6	
		クラス内順位(高校)の%	33.3%	66.7%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	7.7%	36.4%	16.2%	
	合計			度数	26	11
			クラス内順位(高校)の%	70.3%	29.7%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	クラス内順位(高校)	上位	度数	11	18	29
			クラス内順位(高校)の%	37.9%	62.1%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	17.5%	36.0%	25.7%
	中位	度数	43	26	69	
		クラス内順位(高校)の%	62.3%	37.7%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	68.3%	52.0%	61.1%	
	下位	度数	9	6	15	
		クラス内順位(高校)の%	60.0%	40.0%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	14.3%	12.0%	13.3%	
	合計			度数	63	50
			クラス内順位(高校)の%	55.8%	44.2%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%

対称性による類似度

誠実性	値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率	
当てはまる	順序と順序 Kendallのタウ b	-.257	.102	-2.477	.013
	有効なケースの数	76			
当てはまらない	順序と順序 Kendallのタウ b	.119	.197	.602	.547
	有効なケースの数	37			
合計	順序と順序 Kendallのタウ b	-.169	.090	-1.866	.062
	有効なケースの数	113			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-15

表 2-3-15 は高校時のクラス内順位と日頃劣等感を感じるかどうか、そして五因子の性格で「確実に、コツコツと努力する方だ。」という質問で誠実性を問う質問をクロス表分析したものである。この誠実性とはまじめさや勤勉性などのことを言う。この表 2-3-15 から、誠実性が高い学生はスクールカーストの影響を強く受けており、今現在劣等感を感じやすい傾向にあることがわかる。また、逆に誠実性が低い学生はスクールカーストの影響をあまり受けていないことがわかる。これは、元々の性格上、まじめ過ぎなかったが故にスクールカーストをあまり気にしていなかったもしくは以前は誠実性の高い性格だったがスクールカーストを経て性格が変化することでスクールカーストをあまり気にしないような性格になったといういずれかの結果が考えられる。

哲学的、精神的な問題を考える				日頃劣等感を感じるか		合計	
				はい	いいえ		
当てはまる	クラス内順位(高校)	上位	度数	7	12	19	
			クラス内順位(高校)の%	36.8%	63.2%	100.0%	
			日頃劣等感を感じるかの%	14.6%	36.4%	23.5%	
	中位	度数	33	17	50		
		クラス内順位(高校)の%	66.0%	34.0%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	68.8%	51.5%	61.7%		
	下位	度数	8	4	12		
		クラス内順位(高校)の%	66.7%	33.3%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	16.7%	12.1%	14.8%		
	合計			度数	48	33	81
				クラス内順位(高校)の%	59.3%	40.7%	100.0%
				日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
当てはまらない	クラス内順位(高校)	上位	度数	4	6	10	
			クラス内順位(高校)の%	40.0%	60.0%	100.0%	
			日頃劣等感を感じるかの%	26.7%	35.3%	31.3%	
	中位	度数	10	9	19		
		クラス内順位(高校)の%	52.6%	47.4%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	66.7%	52.9%	59.4%		
	下位	度数	1	2	3		
		クラス内順位(高校)の%	33.3%	66.7%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	6.7%	11.8%	9.4%		
	合計			度数	15	17	32
				クラス内順位(高校)の%	46.9%	53.1%	100.0%
				日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	クラス内順位(高校)	上位	度数	11	18	29	
			クラス内順位(高校)の%	37.9%	62.1%	100.0%	
			日頃劣等感を感じるかの%	17.5%	36.0%	25.7%	
	中位	度数	43	26	69		
		クラス内順位(高校)の%	62.3%	37.7%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	68.3%	52.0%	61.1%		
	下位	度数	9	6	15		
		クラス内順位(高校)の%	60.0%	40.0%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	14.3%	12.0%	13.3%		
	合計			度数	63	50	113
				クラス内順位(高校)の%	55.8%	44.2%	100.0%
				日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%

対称性による類似度

哲学的、精神的な問題を考える		値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
当てはまる	順序と順序 Kendallのタウ b	-.208	.106	-1.936	.053
	有効なケースの数	81			
当てはまらない	順序と順序 Kendallのタウ b	-.041	.171	-.243	.808
	有効なケースの数	32			
合計	順序と順序 Kendallのタウ b	-.169	.090	-1.866	.062
	有効なケースの数	113			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-16

次に表 2-3-16 を見る。表 2-3-16 は高校のクラス内順位と劣等感、そして五因子の性格で「哲学的、精神的な問題を考える。」という質問で開放性を問うものである。この開放性とは知性や複雑な認知的刺激を求め、探ろうとする傾向のことを示す。この表 2-3-16 からは、このような開放性が高い学生ほどスクールカーストの影響を強く受けており、またそれを今現在も引きずっている傾向にあることがわかる。また、開放性が低い学生の方がスクールカーストの影響をあまり受けておらず、あまり気にしていない傾向にあることがわかる。

よくストレスを感じたり、不安になったりする				日頃劣等感を感じるか		合計	
				はい	いいえ		
当てはまる	クラス内順位(高校)	上位	度数	9	10	19	
			クラス内順位(高校)の%	47.4%	52.6%	100.0%	
			日頃劣等感を感じるかの%	17.6%	37.0%	24.4%	
	中位	度数	33	15	48		
		クラス内順位(高校)の%	68.8%	31.3%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	64.7%	55.6%	61.5%		
	下位	度数	9	2	11		
		クラス内順位(高校)の%	81.8%	18.2%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	17.6%	7.4%	14.1%		
	合計			度数	51	27	78
				クラス内順位(高校)の%	65.4%	34.6%	100.0%
				日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
当てはまらない	クラス内順位(高校)	上位	度数	2	8	10	
			クラス内順位(高校)の%	20.0%	80.0%	100.0%	
			日頃劣等感を感じるかの%	16.7%	34.8%	28.6%	
	中位	度数	10	11	21		
		クラス内順位(高校)の%	47.6%	52.4%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	83.3%	47.8%	60.0%		
	下位	度数	0	4	4		
		クラス内順位(高校)の%	0.0%	100.0%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	0.0%	17.4%	11.4%		
	合計			度数	12	23	35
				クラス内順位(高校)の%	34.3%	65.7%	100.0%
				日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	クラス内順位(高校)	上位	度数	11	18	29	
			クラス内順位(高校)の%	37.9%	62.1%	100.0%	
			日頃劣等感を感じるかの%	17.5%	36.0%	25.7%	
	中位	度数	43	26	69		
		クラス内順位(高校)の%	62.3%	37.7%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	68.3%	52.0%	61.1%		
	下位	度数	9	6	15		
		クラス内順位(高校)の%	60.0%	40.0%	100.0%		
		日頃劣等感を感じるかの%	14.3%	12.0%	13.3%		
	合計			度数	63	50	113
				クラス内順位(高校)の%	55.8%	44.2%	100.0%
				日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%

対称性による類似度

よくストレスを感じたり、不安になったりする			値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
当てはまる	順序と順序	Kendallのタウ b	-.223	.104	-2.095	.036
	有効なケースの数		78			
当てはまらない	順序と順序	Kendallのタウ b	-.033	.148	-.223	.824
	有効なケースの数		35			
合計	順序と順序	Kendallのタウ b	-.169	.090	-1.866	.062
	有効なケースの数		113			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-17

表 2-3-17 はクラス内順位と劣等感と「よくストレスを感じたり、不安になったりする」という質問で神経症傾向を問うものをクロス表分析した結果である。表 2-3-17 によると、ストレスを感じやすい学生はスクールカーストの影響を受けやすく、今現在もスクールカーストを引きずっている傾向が強いことがわかる。また、この表によれば、高校時のスクールカーストが上位でも下位でも、神経症傾向が高い学生は日頃劣等感を感じやすいことがわかる。逆に、神経症傾向が低い学生は上位でも下位でも、日頃劣等感を感じていないということがわかる。これについても、元々の性格から神経質な性格の人は劣等感を感じやすくスクールカーストを引きずりやすい、もしくはスクールカーストを経験したことによって神経質になり、劣等感を感じやすくなったとも言えるだろう。いずれにせよ、神経症傾向の有無とスクールカーストには関連性があるようだ。

そして下の表 2-3-18 はクラス内順位と劣等感、そして「自分には人よりも優れたところがある」という質問に対する回答をクロス表分析した結果である。先の分析で述べたことではあるが、学生が劣等感を抱くことと人よりも優れたところの有無には相関があることがわかっている。よって、人よりも優れたところがあると感じている学生は劣等感を感じにくく、人よりも優れたところがないと感じている学生は劣等感を感じやすいということがわかっている。この表 2-3-18 を見ると人よりも優れたところがないと感じている学生は、スクールカーストの経験をいまだに引きずっている傾向にあることがわかる。また、この表から、高校ではカーストが上位だった学生でも日ごろ劣等感を感じている学生がいることが見受けられる。ここから、高校ではカーストが上位だったが、大学に入学後に優れたところがないと感じている人は、劣等感を感じやすくなる傾向にあるということもできるだろう。ここまでの表 2-3-15 から 2-3-18 において、スクールカーストと劣等感、そして今現在の学生の性格との関係性を分析した。そして次は「普段劣等感を抱いている。」と回答した学生がどのようなことで劣等感を抱いているのかについてアンケート調査からわかることを分析していく。

人よりも優れたところがある				日頃劣等感を感じるか		合計
				はい	いいえ	
当てはまる	クラス内順位(高校)	上位	度数	9	18	27
			クラス内順位(高校)の%	33.3%	66.7%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	31.0%	42.9%	38.0%
	中位	度数	18	21	39	
		クラス内順位(高校)の%	46.2%	53.8%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	62.1%	50.0%	54.9%	
	下位	度数	2	3	5	
		クラス内順位(高校)の%	40.0%	60.0%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	6.9%	7.1%	7.0%	
合計			度数	29	42	71
			クラス内順位(高校)の%	40.8%	59.2%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
当てはまらない	クラス内順位(高校)	上位	度数	2	0	2
			クラス内順位(高校)の%	100.0%	0.0%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	5.9%	0.0%	4.8%
	中位	度数	25	5	30	
		クラス内順位(高校)の%	83.3%	16.7%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	73.5%	62.5%	71.4%	
	下位	度数	7	3	10	
		クラス内順位(高校)の%	70.0%	30.0%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	20.6%	37.5%	23.8%	
合計			度数	34	8	42
			クラス内順位(高校)の%	81.0%	19.0%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	クラス内順位(高校)	上位	度数	11	18	29
			クラス内順位(高校)の%	37.9%	62.1%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	17.5%	36.0%	25.7%
	中位	度数	43	26	69	
		クラス内順位(高校)の%	62.3%	37.7%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	68.3%	52.0%	61.1%	
	下位	度数	9	6	15	
		クラス内順位(高校)の%	60.0%	40.0%	100.0%	
		日頃劣等感を感じるかの%	14.3%	12.0%	13.3%	
合計			度数	63	50	113
			クラス内順位(高校)の%	55.8%	44.2%	100.0%
			日頃劣等感を感じるかの%	100.0%	100.0%	100.0%

対称性による類似度

人よりも優れたところがある			値	漸近標準誤差 ^a	近似T値 ^b	近似有意確率
当てはまる	順序と順序	Kendallのタウ b	-.102	.114	-.896	.370
	有効なケースの数		71			
当てはまらない	順序と順序	Kendallのタウ b	.174	.150	1.111	.267
	有効なケースの数		42			
合計	順序と順序	Kendallのタウ b	-.169	.090	-1.866	.062
	有効なケースの数		113			

a. 帰無仮説を仮定しません。

b. 帰無仮説を仮定して漸近標準誤差を使用します。

表 2-3-18

それでは、前述した通り学生が普段の生活でどのような劣等感を抱いているのかを分析していく。これはアンケート調査で「あなたは日ごろ劣等感を感じることはありますか?」という質問に対して「はい」と答えた学生にのみ自由回答で「どのような場面で劣等感を感じますか?」という質問に回答してもらった。回答数こそあまり多くはなかったものの、記述されていた回答としては「テスト」、「勉強」、「成績」というような学業に関する回答が最も多かった。それに次いで「仕事ができる人を見たとき」、「能力が高い人を見たとき」という能力的な問題についての回答も多かった。他にも「見た目」や「外見」、「美人な人を見たとき」等容姿・容貌についての記述、「自分よりも楽しそうな人を見たとき」、「人生を楽しんでそうな人がいたり（自分は真面目なことしかできないので、いっぱい遊んだりいろんなところに行ったりして楽しそうな人がいると。）」等娯楽の過ごし方に関するような記述や「彼氏彼女の有無」といった恋愛に関する記述もいくつか見られた。このように、大学生は主に学業や能力差等を他者と比較した際に劣等感を感じやすいということがわかった。また、容姿・容貌ついて劣等感を抱いている回答者もいたため、やはり外見と劣等感の関係は切り離せないものだと感じた。同じような回答をしてくれた学生が何人も見受けられはしたが、それぞれが異なった種類の劣等感を抱いていることを今回このアンケート調査で確認することができた。

この第三節では、行ったアンケート調査の結果を基に、主にクロス表を用いて結果を分析した。次の第四節では、この第二章のまとめを行っていく。

第四節：第二章のまとめ

第四節では第二章のまとめを述べていく。第二章では宇都宮大学の学生 206 名を対象に行ったアンケート調査の結果を主にクロス表を用いて分析した。このアンケート調査の結果、アンケート調査を回答した学生の 85% がスクールカーストという言葉を知っており、スクールカーストという言葉の認知度は非常に高いことがわかった。また、中学・高校時代にどの程度スクールカーストが存在していたのかという質問には、中学校時代では 38% の学生がクラス内にスクールカーストが存在していたと答えたのに対し、高校時代にスクールカーストが存在していたと回答した学生は 24% に減少していた。これより、スクールカーストは高校時代よりも中学校時代に経験することの方が多いということがわかった。しかし、回答した学生の約三割は中学・高校時代のいずれにおいてもスクールカーストが存在していたのかわからないと回答していることから、誰しもが必ず中学・高校時代にスクールカーストを経験しているものではないということもわかった。

次に、中学校と高校時代のクラス内の環境がスクールカーストとどのような関連性があるのかについてアンケート調査のクロス表を用いて分析をした。私はクラス内にスクールカーストが存在していたか否かに対して大きく三つの仮説を立てた。一つ目は、クラス内にスクールカーストが存在するならば、そのクラス内にはグループとグループの間を取り持

つような仲介人の役割を果たすような人物が存在しないのではないか、という仮説である。私は、そのような仲介人の役割を果たす人物がいることによって、グループ間の仲も良好に保たれ、グループ同士の格差のようなものも生まれにくいのではないかと考えた。それによって、結果としてスクールカーストのような現象も起こりにくいと考えたため、この仮説 1 を立てた。この 2 つの要因を取り出したクロス表の分析結果としては、中学・高校ともに有意な結果が見られず、この仮説 1 は正しくないと考えることができる。次いで二つ目の仮説は、クラス内に仕切っているグループが存在すれば、そのクラスにはスクールカーストが生じていたのではないかとという仮説である。これについても、クロス表を用いて分析をした結果、このクロス表は有意だということできた。よって、スクールカーストが存在するクラスには、クラス内を仕切っているグループが存在する傾向がある、ということがわかった。最後に三つめの仮説として、クラス内の男女間の仲が良ければ、スクールカーストは存在しないのではないか、という仮説を立てた。これについても、クロス表分析を用いたところ、有意な結果が出た。よって、クラス内の男女間の仲が良いほうが、スクールカーストも生じにくい傾向にあるということが分かった。以上が、中学校・高校のクラス内環境からわかったことである。

そして中学・高校時代のスクールカーストが今現在の大学生活に与える影響については次のことがわかった。まず中学・高校時代のクラス内順位と劣等感の関係についてはクラス内順位が上位だった学生ほど今現在の生活に劣等感を抱きにくく、反対にクラス内順位が下位だった学生ほど劣等感を抱きやすい傾向にあることがわかった。そして次にスクールカーストと社交性に関してはクラス内順位が上位の学生ほど気軽に遊びに誘える友人の人数が多く、すぐに友達を作ることができる等、外向性が高い傾向にあることがわかった。反対にクラス内順位が下位の学生は上位の学生に比べると外向性が低い傾向にあることがわかった。それから、中高時代にスクールカーストがあったこともしくはなかったことが今現在の自分にどのような影響を与えたのかという質問については自由回答をしてもらった結果、スクールカーストがあったこと、なかったことについてそれぞれ前向きな回答と後ろ向きな回答の両方を得ることができた。前向きな意見としてはスクールカーストがあり上位に位置づいていたことによって、リーダーシップをとることができるようになったといった回答や自分の自信につながったという回答が得られた。しかし、後ろ向きな意見としては、スクールカーストあり、下位に位置づいていたことから、目立つ行動を控えている、周りの視線が気になるようになった等の回答があり、スクールカーストにトラウマを感じているような学生もいることがわかった。アンケートの結果をしてみると、スクールカーストの上位に位置づいていた人においてはポジティブな内容の回答が多く、下位に位置づいていた人においてはネガティブな内容の回答が多いように思えた。よって、スクールカーストから受けた影響は、上位層と下位層では全く異なるということが検証された。

また、劣等感を感じやすいもしくは感じにくい学生にはどのような傾向があるのかをクロス表を用いて分析した。その結果、日ごろから友人と交流を多く図る機会が多い人ほど劣

等感を感じにくいということがわかった。また、気軽に遊びに誘える友人が多い学生ほど人よりも優れたところがあると感じる傾向が高いこともわかった。これらのことから、友人の存在があることによって心にゆとりを生み出す効果があることがわかった。また、学生の大学生生活の満足度に関する調査については、大学生生活が十分に満足できたものであれば日ごろも劣等感を抱きにくく、反対に大学生生活にあまり満足がいってなければ劣等感を抱きやすい傾向にあることがわかった。これらのことから、大学生生活を充実したものとするためには、遊びやサークル活動等を一緒に行うことができる友人が存在することによってより一層大学生生活に充実感を得ることができると考えることができる。

そして、大学生生活の充実度に着目したところ、趣味の有無は大学生生活の充実度と非常に関係性があることが見受けられた。打ち込むことができる趣味を持っていることによって、大学生生活に充実感を感じている学生は多くいるようだ。しかし、この趣味に関しては、一人きりでも没頭できるような趣味ではなく、誰かと関わり合いながらできるような趣味を持つことが大学生生活の充実度を高めるためには重要であるということがわかった。

また、スクールカーストの順位と劣等感の関係について、現在劣等感を感じているもしくは感じていないような人にはどのような特徴があるのかを分析した。分析の結果、スクールカーストと劣等感の関係には、本人の性格が非常に大きな影響を与えていることがわかった。特に、五因子の性格における誠実性、開放性、神経症傾向からは次のことがわかった。まず、まじめさや勤勉さを表す誠実性について、誠実性に当てはまる学生はスクールカースト下位者だけでなく上位者においても日頃劣等感を感じている傾向にあり、今現在もスクールカーストを引きずっていると考えることができる。しかしながら、スクールカーストが下位だった学生でも、そういったまじめさや勤勉さが弱い学生は普段劣等感を感じることもなく、スクールカーストを引きずらずに生活していることがわかる。次に開放性については、スクールカースト中位者・下位者を見ると開放性に当てはまる性格の学生は日頃劣等感を感じることがあり、スクールカーストを今現在も引きずっていると考えることができる。しかし、開放性が当てはまらないような学生は若干であるが下位者においても劣等感を感じていない学生がおり、スクールカーストの経験をあまり意識していないことが見受けられる。ここから、開放性が高い学生はスクールカーストを引きずりやすく、低い学生はあまりスクールカーストを引きずらない傾向にあるということがわかった。そして、神経症傾向についてはこれが高い学生は今現在も劣等感を感じている学生の方が多く見られた。特に、スクールカーストが中位者・下位者で神経症傾向にある学生が劣等感を感じていることが多く、スクールカーストが現在まで影響を及ぼしていると言えるだろう。しかしながら、スクールカースト下位者でも、神経症傾向が低い学生であれば、今現在劣等感を感じずに生活していることもわかった。このように、性格とスクールカーストの関係性については元々の性格がそうだったためにこのような結果が得られたのか、もしくはスクールカーストを経験したことで性格が変化したためにこのような結果に至ったのか、どちらの結論も導き出すことができるだろう。しかし、神経症傾向については、アンケートの自由回答の中で、ス

クールカーストがあったことで周りの視線が気になるようになった、回答した学生もいた。これは、スクールカーストを経たことによって、神経症傾向が高まった学生もいるとすることができるだろう。また、人よりも優れたところを持っている学生は劣等感を抱きにくくスクールカーストを今現在あまり引きずっていない傾向が高いことがわかった。しかしながら、スクールカースト上位であった学生でも今現在劣等感を感じることもあると回答した学生も存在した。これについては、高校時代はスクールカーストが上位だったが、大学に入学してから人よりも優れたところが見つけれなかったというような学生は劣等感を感じやすくなるのではないかと考えることができる。

最後に、アンケート調査でどのような時に劣等感を感じるかという質問について得られた回答を見た結果、最も多かったのは学業に関する回答であることがわかった。テストの結果や成績に関するだけでなく、授業中の発言力や発表の際に劣等感を感じるといった回答も見られた。また、「仕事ができる人を見たとき」、「能力の高い人を見たとき」等、能力的な差を感じたときにも劣等感を感じるが多々あるということがわかった。その他にも外見に関することや娯楽の過ごし方、恋愛に関する問題について劣等感を抱くことがあるという回答も得られた。このように、劣等感とはいっても、何に劣等感を感じるのかは人それぞれであり、多様性に富んでいることがわかった。

第二章ではアンケート調査を実施し、その結果を分析した。第三章では、このアンケート調査を基に、学生へのインタビュー調査を行ったので、そのインタビュー調査について分析・考察を述べていく。

第三章：スクールカーストを経たその後～学生へのインタビュー調査から～

第一節：インタビュー調査の概要

ここではインタビュー調査について概要を説明していく。

(1)調査の目的

このインタビュー調査の目的は、中学・高校時代のスクールカーストを経た（インタビュー対象者の中にはスクールカースト未経験者も含む）大学生が当時それをどのように受け止めていたのか、また今現在もスクールカーストを引きずっているのか・いないのか、そしてそのスクールカーストをどのように乗り越えていったのか等を調査するものである。

(2)インタビューの日程と対象者

インタビュー調査は2016年12月26日に行った。インタビューは約40分程度集団討論のような形で行った。対象者は宇都宮大学教育学部総合人間形成課程の4年生(2017年卒)計6名である。下の表3-1-1に対象者の一覧を記載する。

ここで、表3-1-1の項目について説明する。インタビュー対象者には、11月に配布したアンケートをあらかじめ回答してもらっていた。

まず「スクールカースト(中)」と「スクールカースト(高)」とは事前に行ったアンケートの「クラス内でのあなたの位置づけはどのようなものでしたか?」という質問に対する回答を意味している。(中)が中学校時代、(高)が高校時代のスクールカーストを示している。上が「クラス内順位上位」、中が「中位」、下が「下位」を示しており、×は「スクールカーストがあったかどうかわからない」と回答したものを意味している。

「劣等感」とは、アンケートで「あなたは日ごろ劣等感を感じることはありませんか?」という質問に対する回答を意味している。○が「劣等感を感じている。」、×が「感じていない。」を示している。

名前(仮)	性別	スクールカースト(中)	スクールカースト(高)	劣等感
Aさん	女性	上	中	○
Bさん	女性	中	上	○
Cさん	女性	中	下	○
Dさん	男性	×	×	×
Eさん	男性	中	中	○
Fさん	男性	下	中	×→○

表 3-1-1 インタビュー対象者一覧

この上の表 3-1-1 より、学生時代のそれぞれのスクールカーストの変遷を見ると全員異なるスクールカーストの変遷を経ていることがわかる。この、中学校と高校を比べたときに、どのような変化があったことによって、カーストが変化していったのか、また、スクールカーストを感じていなかった学生にはそのクラスが一体どのような環境だったのか等をインタビューで聞いた。

そして、劣等感に関しては事前のアンケート調査でも自由回答を求めたが、記述では把握しきれないこともあるため、再度アンケートと同じ質問をインタビュー調査でも聞いた。そこから劣等感に関する質問をいくつかインタビューをした。表 3-1-1 の F さんは、アンケート調査時は「普段劣等感を感じない」と回答してくれていたが、インタビュー調査時には「劣等感のような感情を抱くこともある」と語ってくれたため、「×→○」の表記にした。

(3)インタビューの内容

インタビューの内容は以下の通りである。

- ・中学校と高校でクラス内順位が変わっているが、どんな変化があったのか。
- ・クラス内の雰囲気はどのようなものだったか
- ・クラス内の順位がどのような影響を与えたか
- ・スクールカーストを乗り越えようと努力したことはあるか
- ・劣等感を感じることはあるか、またどのような時に劣等感を感じるか
- ・高校と大学で感じ方が変わったことはあるか
- ・自分を変えてみたいと思うことはあるか
- ・(劣等感を感じない人に対して) 劣等感を感じないように心掛けていることは？
- ・劣等感の感じ方で以前と現在で何か変わったことはあるか。

以上をインタビュー調査で質問した。なるべく一つの質問には全員に答えてもらうよう心がけたが、質問内容によっては回答者が限定されてしまう質問もあった。

第二節ではこのインタビュー調査の内容について詳しく述べていく。

第二節：インタビュー調査の分析・考察

第二節では行ったインタビュー調査の分析・考察を行っていく。なお、質問者の発言を「」で示し、インタビュー対象者の発言を「」で示すことにする。質問項目としては大きく分けて6つの質問をさせていただき、そこから回答を得た。そのため、質問項目に関しては質問①～⑥まで番号を割り振った。途中の太字だが番号が割り振られていない質問は、それまでの質問から派生して尋ねた内容の質問となる。また、インタビューの分析については、質問

項目が一つ終わるごとに、その質問に対して分析を行っていくことにする。

(1)インタビューの分析

質問①「中学校と高校でクラス内順位が変わっている人がいたので、クラス内順位が変わった時にどのような変化があったのか、クラス内の雰囲気がどのようなものだったか教えてください。」

先行研究によれば、スクールカーストの上位に位置する生徒には共通点が存在していることがわかっている。その共通点というのはまず一つ目に「にぎやかな生徒」であること。そして「気が強い生徒」や「異性の評価が高い生徒」、「若者文化へのコミットメントが高い生徒」などが挙げられている。一方でスクールカーストが下位に位置するような生徒の共通点は、上位の生徒とは違いはっきりとした特徴がないと言われている。強いて言うならば、「地味」や「おとなしい」のが特徴で、目立った行動を控えるというのが下位に位置する生徒たちの特徴である。では、実際にインタビューを行った結果、どのようなスクールカーストの特徴が見られたのか、分析をしていく。

質問①では、主にどのような人たちがスクールカーストの上位にいたのかという内容について話合ってもらった。回答者によると、スクールカーストの上位に位置していた人たちというのはほとんどの人が運動部に所属していて、元気で発言力が強い人だったという。Cさんは、中学校時代は運動部に所属していたからスクールカーストは高いほうだったが、高校に入学してからは文化部に所属したためクラス内のカーストが下がってしまったように感じていると述べていた。また、Fさんは高校時代のカースト上位者について、人脈が広い、友人が多い、などコミュニケーション能力が高い人物が上位にいたのではないかと述べている。このように、「にぎやか」で「発言力が強い」生徒がスクールカーストの上位に位置していたことは先行研究と同じであるといえよう。また、運動部に所属していたか否かという点も、上位に位置する生徒の特徴として挙げられると言える。そして、スクールカーストでは、人気やモテが最も重視され、学力に関してはあまり重視されていないとされているが、今回インタビューを行った結果、Aさんのクラスでは「頭のいい人」、「成績上位者」がクラスを仕切っていたと答えてくれた。しかし、Fさんは頭の良し悪しはさほど重要ではなかったと答えており、学力に関してはカーストに大きな影響を与えていたこともあれば必ずしもそうではないということもわかった。Bさんによると、「学力が高ければなお上位になりやすい」とのことである。そのため、学力の高さはスクールカーストに関係してはいるが、クラスによっては重要性が高いこともあれば、あまり重要視されていないこともあると考えられるだろう。また、Aさんからの回答によって、先行研究やアンケートの分析結果からも得られたように、先生との仲の良さというものもスクールカーストに関係するということがわかった。鈴木(2012)の研究から、教師目線でもスクールカーストが上位に位置する

生徒には肯定的な見解を持ち、実際に役割を任せやすいのはスクールカーストが上の子たち、との発言もしている。故に、教師から気に入られている生徒はスクールカーストの上位にいる傾向がある、という見解は先行研究やアンケート調査の結果から正しいとすることができるだろう。

また、スクールカーストを感じていなかったという D さんについては、中学校時代はクラス内の男子が全体的に仲が良かったためカーストのようなものを感じられなかったと述べている。第二章ではクラス内の男女間の仲が良いとスクールカーストは存在しにくいということを述べた。D さんの場合、クラス内の男子に着目してカーストについて述べてくれているため、必ずしもそうとは言えないが、クラス内の同性同士の仲が良いことで、スクールカーストが存在しにくい傾向にあると言えるだろう。しかしながら、高校時代に関しては、同じような生徒が集まったクラス内でのスクールカーストはなかったが、クラスごとのカーストのようなものは存在していたようである。よって、アンケートではクラス内にスクールカーストが存在していなかったと回答してくれた学生の中にも、クラスごとのスクールカーストのようなものは存在していたのかもしれないということがわかった。では、下にインタビューの内容を載せていく。

A さん「私の中学校の時は頭のいい人が引っ張っていく感じだったので、学級委員は結構成績がいい人が選ばれる傾向にありました。高校でも同じような学級委員みたいなものがあつたので、成績がいい人がやっぱ、上に、引っ張っていくっていうのがあつたので、私はまあ中学校の時は成績上位の方にいたんですけど、高校ではまあ、中くらいになったので、自分の中ではカーストが変わったような気がしてました。あとは先生からの信頼とか、先生とよく絡む人の方が上位にいたような気がする。」

B さん「私は、中学校と高校のどっちも、いい意味でも悪い意味でも目立つ人が上位に来る傾向がありました。その目立つっていうのは、容姿的な意味でも、あとは発言力、あとは運動部にいるとか、っていう子たちが基本的になんでもやるって感じだった。クラスの行事とかで引っ張っていくのはそういう子たちがやっぱり上にいる印象があつて、私は中学校の時は大体真ん中ぐらいにいたんですけど、その時はあんまり、運動部には所属してたからなんとなく、上位層の恩恵を受けてる感じだったんだけど、でもそれ以上にやっぱり、発言力が強い子、結構口の強い子が多かつたんで、そこらへんほどではなかつたけど。高校入ってからもう、私自身の性格が変わつたってこともあつて、ほんとにただただうるさい、運動部じゃないけどとりあえず、なんか発言力がある子になると結構上になつたので、あと勉強のできるできないは関係なかつたけど、全体的に勉強ができるとなお上にいける感じはある。」

「性格が変わつたというのは、どのような感じで変わつたんですか？」

Bさん「中学校の時っていうよりかは、高1から高2にかけて、自分としてもちょっとこの性格変えたいなって思ったのがあって、まあ、大々的に、キャラ変をしました。それをしたところ、自分としてもなんかびっくりするくらい中心にすることができて、他のクラスからも悪く言えば怖がられるような感じになり、それでそのまま、結構ほかの周りの上の子たちとも一緒にいるようになって、っていうことがあったかな。」

Cさん「私は運動部の人、やっぱりスクールカースト上位にいるかなって感じでした。で、私は中学の時は運動部だったんで、自分的に、スクールカーストの中の上くらいかなって思って、でも高校になって、運動部じゃなくて文化部になってからは、自分は中の下くらいかなって思って、運動部じゃないからっていうのが影響してる、それだけじゃないとは思いますが、やっぱり運動部っていうイメージが私の中では元気とか、抜群なイメージが強くあって、自分が運動部じゃないから、そういうのができないっていうか、そういうイメージを植え付けられて、自分だけちょっとおとなしめに過ごすっていうことをして、そういうことに影響していったんじゃないかなって思います。」

Dさん「自分は、あまり中学も高校もはっきりとしたスクールカーストみたいなのが感じられなかったタイプでして、中学の時も、クラス全体の男だけで集まって遊ぶみたいなものもあったし、なんか出し物やったりするみたいなこともあったので、カーストみたいなものはあまり感じられなかったですね。で、高校の時も、似たような感じの奴らが集まったようなクラスが多くて、なんかクラス内のカーストというよりもクラスごとのカーストのようなもの、他クラスの方がすげーイケてるやつが集まって、なんかイケてないやつらの集まりみたいなクラスだったんで、すごい、他クラスのバスケ部がいい感じの雰囲気です。廊下で話している中、我々は教室内でゲームをやっているみたいな、そんなクラスだったので、クラス内では特になかったですね。クラスごとならあったかも。ちなみにクラスごとのカーストで言ったら低いです。」

Eさん「中学校のときは、スクールカーストはあったと思います。で、その時引っ張ってたのは、イケてるっていうか、ちょっと悪ぶってるみたいなやつとか、あとは運動部に所属して、すごく元気っていう子がいい意味でも悪い意味でも、クラスを引っ張ってたかなあって思います。」

Fさん「中学校の頃はやはりまあ不良というのは言い過ぎですけど、まあ少しイケがってるような、悪ぶってるような人たち、あとはまあ少し偏見かもしれないんですけどそういう人って結構運動部に入っている人も多かったんで、そういう人たちが引っ張っていたかな。特に頭の良さ悪しとか、そういうのはあまり関係なかったかなと思います。で、高校に入って

からは、まあ不良という不良がいなくて、まあいたとしても、それほど目立ってはなく、代わりに上位にいたのが、優等生と言いますか、まあ頭の良さもありますし、あとはみんなから好かれてる人、それこそ人脈が広いとか、友達が多い人とか、そういう人がまあ上位にいたかなと思いますね。」

質問②「スクールカーストがあったこともしくはなかったことが自分にとってどのような影響を与えましたか？」

質問②はスクールカーストがあったこともしくはなかったことが本人にどのような影響を与えたのか、という質問である。最初に質問に答えてくれた C さんは、スクールカーストを経験したことによって未だに上位の人と話をするときは緊張してしまうという。また、初対面の人と話をする時にも、その人がどのような人物かわからないような時には不安を感じあまり自分から積極的に話しかけることもできないとのことだった。このことから、スクールカーストの経験が今現在の対人関係にまで影響を及ぼしていることがわかる。次に質問に答えてくれた E さんについては部活内でのスクールカーストの経験談を話してくれた。E さんの部活動ではスクールカーストが如実にあり、いじめのようなものもよくあったという。今まで上位にいた人たちが次の日にはいじめられていたというような経験もあったため、E さんはその状況に対応するために部員の全員に気を遣うように心がけていたという。また、A さんは、カースト上位者に愛想を振りまき、周りから認められることによって自分の地位も上がっていた気がする」と述べている。そして、周りから認められたという実感もあったため、それが自分の自信につながったとも述べている。また、高校時代にカースト上位にいた B さんは、カースト上位だとすごく生きやすい、と答えてくれた。上位にすることで先生からの扱いが下位の人よりも手厚くなるし、何よりクラス内の行事などはなんでも自分たちが中心になって活動ができるから、楽しく学校生活を送ることができたと述べている。このことから、スクールカーストの上位にすることで、学校の先生からの寵愛の受け方が異なってくるということも起こりうるようだ。鈴木（2010）の先行研究によると、スクールカースト上位者は教師からの信頼が厚く、例えば学校の課題を忘れても上位者はあまり教師から叱責を受けないが下位者はクラスメートの目の前で教師から叱責を受けることが多々あったというような上位者と下位者の扱いの違いについて分析がなされていた。第二章で行ったアンケート調査においても、当時の教師との関わりあいについて質問項目を作り回答をしてもらった。結果として、スクールカースト上位者の方が、学校生活の中で教師との関わりあい親密であるということが分かった。よって、スクールカーストの順位は教師からの扱われ方とも関係するということが分かった。このインタビューの質問は第二章で分析をしたアンケート調査の中でも聞いた項目である。アンケート調査の回答ではスクールカーストがあったこともしくはなかったことに対して肯定的な意見と否定的な意見のどちらも見受けられた。このインタビューの中でも、スクールカーストがあったこと、

なかったことで自分にとってポジティブに働いたこともあれば、逆に今現在の生活にネガティブな影響を与えるような結果になっている人もいる。しかし、スクールカーストを感じなかったという D さんにおいては、先生の対応の違いというものを感じなかったと言っているので、A さんや C さんのようにスクールカーストの有無から強い影響を与えられたわけではないと考えられる。このことから、スクールカーストが存在していたことによって個人の人格形成等に影響を及ぼす場合もあるということがわかった。

C さん「私はすごく人見知りで、スクールカーストを感じることはあったので、(今でも)上位の人と話すときはちょっと緊張する。あと、実際に新しい環境に行くとその人がどういう人かわからなくて、めっちゃ強い人かもしれないって勝手に想像して怖いなって思っちゃって、あんまり話しかけられないとか。そういうのがスクールカーストに関係してるのになって思います。」

E さん「クラス内ではなかったけど、部活内でスクールカーストがあった。自分は野球部で、その中では(スクールカーストが)はっきりしていて、いじめみたいなのもちよこちよこあって、それまでトップだった人がいつの間にかハブられてるみたいなのもあった。だから、次の日相手がどんな立場かわからないから、一応気を遣うというか、全員に愛想を振りまくみたいなことはしてた。」

A さん「私は自分を上の中くらいだと思ってて、上位の人たちと仲良くすることで自分の順位も上がったというか、愛想を振りまいて気に入られることによって他の人から見た自分の順位も上がっていたような気がします。上の人に認められたっていうことで自分の自信にも繋がったと思います。」

F さん「(自分にとって影響が)特になかったという点で、スクールカーストみたいなものが今思えばあったかなと思うけれど、上位の人に気に入られたからどうだってことは特になかったので、自分の好きな仲間と楽しくのうのうと学校生活を送っていたので、僕の場合は上位と積極的に関わろうということにはなかった。」

B さん「高校で上位の方にいるようになって感じたのは、上位にいるとすごい生きやすいっていうのがあって、何しても若干許される感じがある、例えば授業妨害とか、先生ここのわからないです、みたいなことを言っても先生はかまってくれるので。たぶんそれが上位じゃない子たちは言えなかったりとか、先生からの寵愛のされ方も違って来る。目立つ子に先生も任せたりすることが多かったりするから、クラスの行事とかなんでもそうだけど、全体の流れを任されるっていう部分において自分たちが主役、中心にいれるから私はすごく楽しかったし、逆に自分をもっと出していかないと、楽しくないし、内にこもっていると楽しく

ないんだなって感じたかな。」

Dさん「俺のクラスは結構みんなまんべんなく先生のことをいじってたから、スクールカーストが上位の人が先生と仲が良かったっていう感じではなかったかな。」

質問③「スクールカーストが下だなと感じた時に、乗り越えようとした経験等がありますか？」

質問③はスクールカーストの経験を乗り越えようとしたことはあるか、という質問である。この質問に対して Bさんは高校一年から二年次にかけて大々的にキャラ変をした、と語ってくれた。自分を変えようと思ったきっかけは中学校時代の時のことでその当時はカーストもあまり高くなくクラスの中心的な存在ではなかったという。しかしながら、このキャラ変をしたことによって、クラス内でもカーストが上位に変わることができ、学校生活がもっと楽しくなった、と述べている。このように、今までの自分のキャラクターを変えてみることによって、カーストにも変化が現れたこともあったということがわかった。また、Fさんにおいては、それまでのカーストが心地よかったため、それを崩したくないという思いから友人についてよく考え、人を大切にするようになったと述べていた。カーストを乗り越えたり、変化させたりするのではなく、それまでのカーストを維持するために現状を維持するような働きかけを行う人もいたということがわかった。

Bさん「中学校の 때가それだった。それほど下だったわけでもなく、上位の人とも話せてたけど、そこまで中心にはいられないところがあった時に、自分を変えたいと思ったきっかけになったのは、私の見た目がその当時暗くてきつそうだったってのがあって、目が悪かったから目つきが悪かったりとかもして、性格的にもそんな外向的ではなかったから、先生からも周りからも認められてもっと楽しく過ごすためには、もうちょっと素直に自分を出せるようになる必要があるんだと思って、でもそのまま素直になったとしても周りから認められるかどうかはちょっと別の話だから、もっと振り切ってみないと周りも気づいてくれないから、大々的にキャラ変をするに至った。」

「他の方でそういう経験ありますか？」

Eさん「変えたのは髪形くらいかな？」

Bさん「制服の着方とか。」

Aさん「高校の時とかは自分的には短くしなくてもいいけど、皆に合わせて短くしたほうが

いいのかなって思ってた。ジャージのチャックとかも、別に下げたいわけじゃないけどみんなが下げてるから下げるみたいな感じだった。」

Fさん「関係あるかわからないけど、そのカーストの中でぬくぬく暮らしてきて、むしろ今までのカーストが崩れたら、ぬくぬく暮らせなくなったら嫌だなって感じて、人を大切にしようになったっていうのはあるかな。そこで亀裂とかが生じたらお互い嫌だろうから、友達について良く考えるようになりました。」

質問④「普段どのような時に劣等感を感じますか。」

質問④は劣等感についてそれぞれ感じることを述べてもらった。Bさんは劣等感とは少し違うかもしれないが、容姿がきれいな人や、かっこいい人を見ると抵抗を感じる時があるとのことだった。これについてBさんは、以前から感じていたことではあるが、大学生になってからのほうがより一層強く感じるようになったと述べている。これに関しては、大学生は制服やジャージが統一されていた高校とは異なり、自分に似合った服装などをするようになることによってからだということであった。先行研究の分析からも述べたように、他者との社会的比較が頻繁に行われる青年期には、劣等感の中でも容姿や容貌に関して劣等感を抱くことが多く行われるとされている。インタビューでも、Bさんは容姿に関して劣等感を抱くことがあると述べてくれた。しかしながら、Aさんは、容姿よりも自分にはできないことを相手ができたときなど、相手と能力的な差が生じたときに劣等感を感ずやすいと話してくれた。したがって、第二章の劣等感に関する分析の際にも述べたように、人は外見に関してだけではなく、個人の能力的な問題について劣っていると感じるような時や自分の将来のことについて友人と比較をした時など、様々な事柄について劣等感を日々感じていることがわかる。そして、このような劣等感を抱いた時の対処法や改善しようとしたことはあるかと聞いてみたところ、その部分に対してはもう勝てないから、別のところで頑張ると話してくれた。したがって、劣等感を感ずた際には、人とは異なる自分の優れた部分を見つけたり、別の自分が持っている能力を他者よりも伸ばしたりすることによって、抱いた劣等感を和らげたり、劣等感を感ずないように心がけるという対処法を行うことが効果的であると考えることができるだろう。

Bさん「劣等感ではないかもしれないけど、抵抗を感じる。すごくきれいな人とか、イケメンな人を見ると、ちょっと待つて無理！っていう抵抗をいったん感じる。劣等感っていうほどのものじゃないけど、すごく壁を自分で勝手に作っちゃうのはある。それが通り過ぎりの人とかなら別にいいんだけど、実際に自分がその人と関わらなきゃいけない時には、友達としても、仕事とか、大事な局面で関わっていかなくちゃいけない時に、威圧感っていうのはすごいあるなっていうのを日々感じる。」

「それはずっとそうですか？」

Bさん「うん、ずっとそうかなあ。でもどちらかというとな大学に入ってからの方が大きいかもしれない。高校までは制服だし、そこまではなかった。だけど大学に入ってから、大人に近づいていく局面で、自分のことがそれなりにわかって、自分に似合う洋服とかを着ていてきれいにしている人を見ると、ちょっと圧倒される。」

「高校と大学で感じ方が変わったこと等はありますか。」

Bさん「容姿に関してなら、ある。」

Aさん「容姿より、自分ができないことができる人を見ると、ああ、って感じる。これは高校も大学も変わらないです。」

「そう感じたときに、何か自分を変えようと思ったことはありますか？」

Aさん「変えるというか、もう勝てないので、違うところで頑張ろうって思うようにした。悪く言えば逃避だけど。良く言えば見方を変えるみたいな。」

Dさん「大学生になって変わったなって思うことが一つあって、自分の将来に向かってすごい頑張ってる人を見るとすげえなって感じるのが、大学生になって、年を取るにつれてすげえなって感じる大きさが変わっていった。知り合いで趣味で生きていくみたいなやつもいるし、結果残してるやつもいるから、そういうやつを見ると、方向性は違えど、自分の夢に向かってるんだなと思うと、ああ俺ってひどいなって思うこともある。これは、大学に入ってからの方がずっと大きくなって。高校の時は漠然と大学に進学するっていう目標があったけど、就職ってなると幅が広がるから、それができる環境にいるのに、それができない自分ってくそだなあって。だから、動いてるやつはすごいって思う。」

「就活中に何か思ったりしたことはある？」

Bさん「私の高校の時の友達が、大学教授になるっていう子がいて、女の子なんだけど物理科で、女性が生きていきにくい世界ではある中で、私も研究職っていうところにちょっと憧れてたことがあって、でも自分は安定をとるか、どっちをとるかすごく悩んだ時期があった。でも結局安定した職を選んだ。けど、この職が決まったあとに友達が自分の夢に向かっているって聞いたときには私のやりたいことって本当にこっちだったのかなって思った時

もあったし、若干その子に対して劣等感を感じる部分はあった。」

質問⑤「劣等感を感じない人はなぜ感じないのか。普段感じないように心がけていることはありますか？」

質問⑤は事前に行ったアンケート調査で日ごろ劣等感を感じないという人もいたため、その人に対して回答を得たものである。劣等感を感じないような人たちは、普段どのようなことに心がけているのだろうか。Fさんによれば、それまで生きてきた境遇がそれぞれ異なるため、差異が生じることはしょうがないことだと割り切っている、そこで自分がダメなやつだと思ってもしょうがない、と答えてくれた。他人と差異が生じて、それが他人よりも自分の方が劣っていたり、できないことがあったりしても、それに対して劣等感を抱くのではなく、自分は自分、他人は他人と割り切ることも大切だということだ。しかしながら、普段劣等感を感じないと回答していたFさんも、同じサークルの同期との実力差が出てしまう時などには、劣等感を感じることもあると回答してくれた。Fさんの回答からもわかるように、アンケート調査の中では、「普段劣等感を感じることはない」と回答している人でも、劣等感を感じる場面は少なからずあるのではないかと感じた。

Fさん「劣等感を感じない場合は、もうその人とは生まれた境遇とかが違うから、ゲームに例えると、ステータスの割り振りみたいな、体力とか、その割り振りが違うから、もうしょうがないことなのかな、って思って、割り切るようにしている。たまたま自分にはなかったただけだけど、それで自分がダメなやつって思ってもしょうがないから。でも劣等感を感じる時は、全く同じ境遇の人、音楽系のサークルに入ってて、楽器を弾くんだけど、大学に入ってから楽器を始めたって人も多いんですけど、その時点でスタート地点は一緒なのに、四年後には実力に差が出てしまう、練習量もあまり変わらなくて、むしろさほど練習していないような人が意外と上手かったりとか、そういう時はすごく悔しいなっておもうこともある。全く同じスタートラインだったのにつて。」

質問⑥「劣等感の感じ方は変わったのか、なぜ変わったのか。」

質問⑥は劣等感の感じ方について昔と変わった点はあるかどうかを質問した。しかしながら、回答者の方々は昔も今も劣等感の感じ方についてあまり変化はないとのことだった。Eさんは同い年や年下が自分よりも能力が高いと感じた瞬間に劣等感を感じることもあるという。そのような劣等感を感じたときにどう対処したのかという質問に関しては、目を背けた、逃避、割り切ることが大切だと話してくれた。Cさんも、人前で話すことが上手な人を見ると、劣等感を感じることもあるという。人前で話すことがあまり得意ではないというCさんは、苦手意識があることに対して、何回も取り組むことで慣れが生じ上達していく

ことで劣等感も感じにくくなるのではないかと述べている。Cさんのように、苦手意識を感じ劣等感を感じるようなことにも、何度も挑戦して自分の能力を高めることによって、そのような劣等感を克服することもできるのではないだろうか。

Eさん「能力が高い人とか仕事ができる人を見ると、劣等感を感じる。年上なら、年の功もあって経験があつてって割り切れるけど、ためとか年下とかでできる子を見ると、なんで年下の子ができて俺の方ができないんだっていうときにすごく劣等感を感じる。それはずっと変わらない。中学の部活の時も年下の子にレギュラー取られたら、なんで俺の方が一年早くやってんのにつて思った。」

「それに対してなにか取り組んだことはありますか？」

Eさん「目を背けまくった。逃避。こういう人もいるんだなあと。割り切ることだね。」

Cさん「感じ方に変化はなかったかな。人前に立つことが嫌いで。一対一で話すときは意外と大丈夫なんだけど、目立つようなところがあまり得意じゃないなって思ってた、でも大学に入って感じたのは、高校の時よりもそういうの上手い人はめっちゃ上手いなって。大学に入ってからそういうのに立つ場面が多くなったからかもしれないけど、そういう人を見ると、なんでそんなにうまく話せるんだろうって劣等感を感じる。」

「それに対してなにか取り組んだことはありますか？」

Cさん「実習中、人前に立って話すことが多かったんだけど、何回も同じことをすると徐々に上手くなっていくっていうか、慣れが大切かなって思った。苦手意識はあるけど、何回もそういう場面に立ったら、ちょっとは劣等感を感じなくなるのかなって思って、そういう場面から逃げずに、取り組んでいきたいなって思いました。」

以上がインタビューについての分析である。次の第三節では三章のまとめを述べていく。

第三節：第三章のまとめ

第三節では第三章のまとめを述べていく。インタビュー調査の結果、スクールカーストが上位であり、クラスを引っ張っていくような人たちには共通点があることがわかった。運動部であること、発言力が強いこと、社交性が高いこと等、良い意味でも悪い意味でも目立つような生徒がスクールカーストの上位者である傾向が高いということがわかった。また、クラス内ではスクールカーストが存在していないような場合でも、クラスごとに目を向けて

みると、クラスごとにはスクールカーストが存在するということがわかった。また、スクールカーストの経験がその本人の今現在の性格に影響を及ぼしているということもインタビューから確認することができた。よって、スクールカーストとは、主に中高時代に経験することではあるが、人によってはその経験が後々のトラウマになったり、自己の人格形成にまで影響を及ぼしたりするような経験にもなりうると言えるだろう。その時のスクールカーストの地位に不満がある、もっと楽しい学校生活を送りたい、と考える場合には、大々的なキャラ変を行い、今までとは違う自分になることによって、カーストを変動させることも可能である、ということがわかった。しかし、逆にその時のクラス内全体のカーストを崩したくない、と感じるような人も中には存在し、そのような人はカーストを維持するための工夫を凝らすようなことを行うことがあるということもインタビューから聞き出すことができた。

そして劣等感に関しては、容姿や能力の差を感じたときに劣等感を抱きやすいという回答が得られた。この劣等感の感じ方については回答者のほとんどが今も昔も変化はないと答えている。しかしながら、制服やジャージが統一されていた中学校や高校と違って、自由な服装ができる大学生の時の方が、外見に関して劣等感を抱きやすくなったとの回答も得られた。またそれだけではなく、中学・高校のような狭い空間から抜け出し、色々な可能性を見つけ出すことができる大学生となってから、就職等将来と直結するような事柄に関して劣等感を抱くことも多くなったとの回答も得られた。今回のインタビューを通して、劣等感を感じた際には、自分は自分だと思ふ、何かほかの特技を伸ばす、割り切って行動をすることをすることによって、感じた劣等感を和らげたり、劣等感を感じないようにしたりすることで、劣等感を抱いてもそれほど落ち込むことなく生活していけるということがわかった。また、苦手意識を持っているようなことでも、何度も練習を重ね、慣れることによって、感じる劣等感を軽減することができるとの回答を得ることができた。

これらのことを踏まえて、第四章では全体の総括を行っていく。

第四章：総括～スクールカーストを経たその後の過ごし方について～

第四章ではこれまでのまとめを行っていく。第二章ではアンケート調査からスクールカーストを今現在の大学生がどのように認識していたか、どのように受け止めていたのか、スクールカーストと劣等感との関係性について分析を行った。第三章では、そのアンケート調査を受けて学生へのインタビュー調査を行った。第四章では、第二章と第三章を受けて、今後のスクールカーストとの付き合い方について、自分なりに考察をしていきたい。

第一節：アンケート調査から

(1) スクールカーストを引きずらないために

アンケート調査から、学生の劣等感とスクールカーストには相関があることがわかった。学生の中には、未だに中高時代のスクールカーストの経験をいい意味でも悪い意味でも引きずっている人もいる。スクールカーストを経験したことによってリーダーシップがとれるようになった、みんなに分け隔てなく接することができるようになった等は学生にとってポジティブな影響を与えたと言えるだろう。では、周りの目線を気にするようになった、ひそひそ話におびえるようになった、思い切って発言ができない、というようなネガティブな影響を受けてしまった学生は今後どのようなことを心がけて過ごしていけばよいのだろうか。アンケート調査の分析を受けて、スクールカーストを引きずる人と引きずらない人の違いについて考えた。その結果、それは本人の性格と関係性があるということがわかった。スクールカーストを気にしていないもしくはそれを克服することができた学生には下記のような共通点があると考えることができる。

- ① まじめすぎないこと(五因子の性格の誠実性から)
- ② ある程度物事に無頓着であること(五因子の性格の開放性から)
- ③ 不安や緊張感をあまり抱かないこと(五因子の性格の神経症傾向から)
- ④ 人よりも優れた部分を持ち合わせていること

したがって、スクールカーストを克服するためには、大学生活を充実させることよりも、本人の性格そのものを変えるように努力することが重要なことだと言えるだろう。スクールカーストによってネガティブな影響を受けてしまった学生でも、今後の性格の変容でスクールカーストの経験から解放されると言えよう。

(2) 大学生活をより一層充実させるためには

先でスクールカーストを克服するためには性格の変容が重要であると述べたが、学生が劣等感を抱くことと大学生活の充実度にも、相関があることがアンケート調査からわかっている。したがって、スクールカーストを気にしないようになるには、大学生活が充実していることも一つの要因として働くと考えた。よって、ここでは大学生活をより一層充実させるためには何が大切かについて考察したい。アンケート調査等から分析をした結果、下に記

述することが、大学生の学生生活に高い充実度を与える要因となっている。

- ① 気軽に遊びに誘える友人が存在すること
- ② 没頭できる趣味を持っていること(一人でもできる趣味より複数人で行うことができる趣味の方が良い)

このような共通点を持つ学生は今現在の生活に高い充実感を抱いていることがわかった
よって、一つの例として、友人をたくさん作ることやサークル活動や部活等の趣味を見つける
ことは、大学生生活の充実度を高めるために大切なことであると言えるだろう。

第二節：インタビュー調査から

第二節ではインタビュー調査から今後のスクールカーストとの付き合い方について考察
していく。

(1)「自分は自分」だと思えることが大切

インタビュー調査の際に、劣等感を感じた時にどのような対処をしているかと質問をし
た。その結果、普段あまり劣等感を感じないという学生は「その人と自分は違うから、自分
にはそれがなかっただけだと割り切って考えるようにしている」と話していた。この発言か
ら、自分にはないものをうらやましがったり、劣等感を感じたりするのではなく、今持って
いる自分のスキルを伸ばすことが劣等感を感じないようになるための一歩だと考えた。割
り切った行動、自分の持っているスキルを向上させる働きかけを行うこと、そういった行動
を起こすことが、劣等感を感じにくくするために大切なことだと言えよう。

第三節：第四章のまとめ

第三節は第四章のまとめを行う。これまでスクールカーストが大学生の現在に与える影
響についてアンケート調査とインタビュー調査によって明らかにしてきた。その結果、当時
スクールカーストを感じていた学生によっては、スクールカーストの経験がその後の生活
にとって生きやすいものになったり、逆に生きづらいものになったりとそれぞれであるこ
とがわかった。また、今現在に至っても、いい意味でも悪い意味でもスクールカーストを引
きずって生活している学生が存在していることもわかった。中学・高校時代に経験したスク
ールカーストで生きづらさを感じるようなことがあったとしても、上で述べたような考え
方を持って、生活していくことで、スクールカーストを克服することも可能であると言え
るだろう。本論がスクールカーストを克服するための一例として参考になればいいと思う。

おわりに

本論では、アンケート調査・インタビュー調査の結果から、鈴木の研究では触れられなかった中学・高校時代に経験したスクールカーストが大学生の現在にどのような影響を与えているのかが明らかになった。第二章では、アンケート調査により大学生におけるスクールカーストの認知度、スクールカーストの有無により与えられた影響、スクールカーストを今現在どの程度引きずっているか、等がわかった。また、第三章では、インタビュー調査の分析から、スクールカースト上位者の特徴や劣等感との関係が明らかになった。また、今回インタビューでは当時スクールカーストを感じていなかった学生にもインタビューを行い、スクールカーストが存在しないクラス状況とはどのようなものなのかということが明らかになった。結果として、クラス内ではなくても、クラスごとのスクールカーストは存在していたということがわかった。これらを踏まえて、第四章では、中高時代にスクールカーストを経験したその後、スクールカーストとどのように向き合い、克服すればよいかについて論じた。

以上より、鈴木の研究では取り上げられることがなかった、大学生がスクールカーストから受ける影響とそれを克服するための対処法について論じていくというような本論の目的はおおむね果たすことができたと言える。

しかし、今回のアンケート調査を実施した学生は宇都宮大学の教育学部の学生のみであり、学部により偏りができてしまった。そのため学部ごとや大学ごとのスクールカーストに関する認識の違いを調査することができずに調査にも偏りが生まれてしまったように思える。したがって、このテーマの調査研究について、複数の大学や専門学校の学生の事例を加えることで、スクールカーストが与える影響について新たな発見が見出されることを期待したい。

謝辞

本論の作成にあたり、指導してくださった小原一馬先生とインタビューやアンケートに快く答えてくれた宇都宮大学教育学部の学生、研究資料を送ってくださった秋田大学の鈴木翔先生に感謝申し上げます。

参考文献

- 鈴木翔（2011）『なぜ「スクールカースト」は維持されるのか？－生徒と教師のインタビュー調査の比較から－』、日本教育社会学会大会発表要旨集録(63)、26-27 ページ
- 鈴木翔（2010）『「スクールカースト」とは何か？－首都圏の公立中学生を対象とした質問紙調査の分析から－』、日本教育社会学会大会発表要旨集録（62）、196-197 ページ
- 高坂康雅（2009）『青年期における容姿・容貌に対する劣勢を認知したときに生じる感情と反応行動と関連』 教育心理学研究、57、1-12 ページ
- 栗谷初子・本間友巳（2009）『思春期の自己肯定感の在り方に影響を及ぼす要因について－学校生活適応感、生活習慣との関係を中心に－』 京都教育大学教育実践研究紀要 第10号、193-202 ページ
- 須藤春佳（2014）『友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係』 神戸女学院大学論文集 第61巻第1号、115-126 ページ
- 栗林克匡（2015）『大学入学前後の生活変化が劣等感に及ぼす影響』 北星学園大学社会福祉学部北星論集第52号、1-10 ページ
- 鈴木翔（2012.12.14）『教室内(スクール)カースト』 光文社新書
- 森口朗（2007.6.1）『いじめの構造』 新潮新書
- 土井隆義（2009.6.5）『キャラ化する/される子どもたち－排除型社会における新たな人間像』 岩波ブックレット

調査資料

「中高の学校生活が、大学生の現在に与える影響に関する意識調査」

性別（女・男）学年（ ）年 学部（ ）

【調査の目的】

私は現在、中高時代の経験が大学生の現在に与える影響について、卒業論文を作成しています。ここから得られた回答は研究目的にのみ用い、プライバシーには最大限注意致します。ご協力よろしくお願い致します。

【記入にあたってのお願い】

特に断りのない限り、あてはまる数字1つに○をしてください。

A) あなたの中学校時代(中学三年次)についての質問です

(ア) あなたが通っていた中学校はどちらでしたか？

1. 公立 2. 私立

(イ) あなたが通っていた中学校の形態はどちらでしたか？

1. 共学 2. 男子校/女子校

(ウ) あなたのクラスでは友人間で固定されたグループが形成されていましたか？

1. はい 2. いいえ 3. わからない

(エ) (ウ)ではいと回答した方に質問です。他のグループとの交流の頻度はどのくらいありましたか。

1. よくあった 2. 時々あった 3. あまりなかった 4. なかった

(オ) クラス内にそれぞれのグループ間を繋ぐ/複数のグループと関わっているような人はいましたか。

1. いた 2. いなかった 3. わからない

(カ) クラス内の男女間の仲はどのようなものでしたか？

1. とてもよかった 2. よかった 3. あまりよくなかった 4. 悪かった

(キ) クラス内のグループ間で上下関係はありましたか？

1. はっきりあった 2. 曖昧だがあった 3. ほとんどなかった 4. なかった

(ク) クラス内でクラスを仕切っているグループはありましたか？

1. あった 2. なかった 3. わからない

(ケ) (ク)であったと回答した方に質問です。そのグループはどのような人たちが中心でしたか？(複数回答可)

1. 運動部 2. 文化部 3. ヤンキー系 4. イケメン 5. 清楚系
6. ギャル系 7. 真面目系 8. 意識高い系 9. その他()

(コ) 中学校時代は何部に所属していましたか？

1. ()部 2. 所属していなかった

(サ) スクールカーストという言葉を知っていますか？

1. よく知っている 2.なんとなく知っている 3. あまりよく知らない 4. 全く知らない

(シ) あなたのクラスにはスクールカーストが存在していたと思いますか？

1. はい 2. いいえ 3. わからない

(ス) クラス内でのあなたの位置づけはどのようなものでした？

1. 上のほう 2. 中間 3. 下のほう 4. わからない 5. 上下関係はなかった

(セ) あなたは、学校の先生から高く評価されていましたか？

1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

(ソ) あなたは、学校に親しく話すことができる先生がいましたか？

1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

(タ) あなたは、学校の先生から話しかけられることが多かったですか？

1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

B) あなたの高校時代についての質問です。(中学時代と同じ質問となりますが、お答えください。)

(ア) あなたが通っていた高校はどちらでしたか？

1. 公立 2. 私立

(イ) あなたが通っていた高校の形態はどちらでしたか？

1. 共学 2. 男子校/女子校

(ウ) あなたのクラスでは友人間で固定的なグループが形成されていましたか？

1. はい 2. いいえ 3. わからない

(エ) (ウ)ではいと回答した方に質問です。他のグループとの交流の頻度はどのくらいありましたか。

1. よくあった 2. 時々あった 3. なかった 4. わからない

(オ) クラス内に、それぞれのグループ間を繋ぐ/複数のグループと関わっているような人はいましたか。

1. いた 2. いなかった 3. わからない

(カ) クラス内の男女間の仲はどのようなものでしたか？

1. とてもよかった 2. よかった 3. あまりよくなかった 4. 悪かった

(キ) クラス内のグループ間で上下関係はありましたか？

1. はっきりあった 2. 曖昧だがあった 3. ほとんどなかった 4. なかった

(ク) クラス内でクラスを仕切っているグループはありましたか？

1. あった 2. なかった 3. わからない

(ケ) であったと回答した方に質問です。そのグループはどのような人たちが中心でしたか？(複数回答可)

1. 運動部 2. 文化部 3. ヤンキー系 4. イケメン 5. 清楚系
6. ギャル系 7. 真面目系 8. 意識高い系 9. その他()

(コ) 高校時代は何部に所属していましたか？

1. ()部 2. 所属していなかった

(サ) あなたのクラスにはスクールカーストが存在していたと思いますか？

1. はい 2. いいえ 3. わからない

(シ) クラス内でのあなたの位置づけはどのようなものでしたか？

1. 上のほう 2. 中間 3. 下のほう 4. わからない
- (ス) あなたの高校時代の校内での成績はどのくらいでしたか？
1. 上位 2. 中の上 3. 中の下 4. 下位

- (セ) あなたは、学校の先生から高く評価されていましたか？
1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

- (ソ) あなたは、学校に親しく話すことができる先生がいましたか？
1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

- (タ) あなたは、学校の先生から話しかけられることが多かったですか？
1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

C) あなたの現在についての質問です。

- (ア) あなたには胸の内を明かすことができる友人がどれくらいいますか？
1. いない 2. 1人～ 3. 5人～ 4. 10人～

- (イ) あなたには気軽に遊びに誘える友人はどれくらいいますか？
1. いない 2. 1人～ 2. 5人～ 4. 10人～

- (ウ) あなたは日ごろ劣等感を感じることはありますか？
1. はい 2. いいえ 3. わからない

- (エ) (ウ)ではいと回答した方に質問です。どのような場面で劣等感を感じますか。(自由回答)

- (オ) あなたには現在打ち込めるような趣味や活動がありますか？
1. ある 2. ない

(カ) あなたには現在一人きりでも没頭できるような趣味や活動がありますか？

1. ある 2. ない

(キ) あなたの現在の大学生活はどの程度充実していますか？

1. とても充実している 2. まあ充実している 3. あまり充実していない 4. 全く充実していない

(ク) あなたは普段から服装や髪形等のおしゃれに気を遣っていますか？

1. とても気を遣っている 2. まあ気を遣っている 3. あまり気を遣っていない 4. 全く気を遣っていない

(ケ) あなたは普段、友人等から服装(身なり)をほめられることがありますか？

1. よくある 2. ときどきある 3. たまにある 4. 全くない

(コ) あなたには次のことがどれくらい当てはまりますか。a～c のそれぞれについて、あてはまる番号一つに○をつけてください。

a. 自分には人よりも優れたところがある。

1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

b. 今の自分を変えたいと思っている。

1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

c. 初対面の人と話すのは苦手だ。

1. 当てはまる 2. まあ当てはまる 3. あまり当てはまらない 4. 全く当てはまらない

(サ) 中高時代にスクールカーストがあったこともしくはなかったことが現在のあなたにどのくらい影響を与えていると思いますか？

1. とても与えている 2. まあ与えている 3. あまり与えていない 4. まったく与えていない 5. わからない

(シ) (サ)で1と2と答えた方に質問です。それは現在のあなたにどのような影響を与えていると思いますか？(自由回答)

D) あなたの性格に関する項目です。一番近いものに丸をつけてください。

(ア) すぐに友達を作ることができる。

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. あまりあてはまらない 5. あてはまらない

(イ) 相手の考えていることに気を遣う。

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない 5. あてはまらない

(ウ) 確実に、コツコツと努力する方だ。

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない 5. あてはまらない

(エ) 哲学的、精神的な問題を考える。

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない 5. あてはまらない

(オ) よくストレスを感じたり、不安になったりする。

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない 5. あてはまらない

(カ) 授業などのグループワークの時に、リーダーシップをとって、みんなの意見を一つにまとめることができる。

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない 5. あてはまらない

これで質問は終わりです。ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

教育学部 総合人間形成課程 地域公共領域 4年 平山愛理

担当教員 小原一馬